

志木市遺跡群 14

田子山遺跡第81地点

西原大塚遺跡第65地点

2004

埼玉県志木市教育委員会

はじめに

志木市教育委員会
教育長 細田 信良

平成15年1月、市内の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）は16ヶ所から14ヶ所に変更されました。これは教育委員会が、過去の詳細な調査データに基づき、遺跡に指定されながらも遺構・遺物の検出例が無いに等しい市場遺跡と氷川前遺跡の2遺跡を削減したためです。同時に削減はしないものの8遺跡で範囲の縮小も実施しました。

これにより、教育委員会では、手続き上に係る事務量の削減や確認調査に使用する重機のコスト削減が今まで以上に実現されたと言えるでしょう。今後も文化財保護行政を充実させるために、こうした改善を進めていきたいと考えております。

さて、ここに刊行する『志木市遺跡群14』は、国庫・県費補助事業として、教育委員会が、平成14年度に実施した市内遺跡発掘調査事業の調査成果を収録したものです。

平成14年度は、確認調査・発掘調査等を併せ、36地点の調査を実施しましたが、本書は、この中で発掘調査を実施した田子山遺跡第81地点、西原大塚遺跡第65地点の調査成果を主にまとめています。

主な内容についてですが、田子山遺跡第81地点からは、小竪穴状遺構1基、土坑1基と溝跡1条が検出されています。これらの遺構からは、良好な出土物が無かったため、時期の比定についても難しいですが、10号溝跡については、過去の周辺の調査も踏まえて考えるとどうやら本町2丁目地内の御嶽神社を取り囲むように大きな堀跡が廻るものと推定されるようです。結論はまだまだですが、古墳の周溝という可能性もあり、本市では古墳の確認例がないため、今後の詳細な調査に大いに期待されるものと言えましょう。

また、西原大塚遺跡第65地点からは、弥生時代後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡3軒が検出されました。特に古墳時代前期の373号住居跡からは、小型精製品を中心とした精巧な作りの土器が比較的多く出土しました。

以上のような貴重な発見により、志木市の歴史にまた新たな1ページが追加されたことは大変喜ばしいことであり、同時に本書が郷土の歴史研究のために広く活用されますよう切に願っています。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、ご指導ご協力をいただきました文化庁、埼玉県文化財保護課、そして深いご理解とご協力を賜りました地元の方々並びに関係者に対し、心から厚くお礼申し上げます。

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市に所在する遺跡群の平成14年度分の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査・整理作業は、志木市教育委員会が主体となり、国庫及び県費の補助金の交付を受け実施した。発掘調査は、平成14年4月1日より平成15年3月31日までの期間を対象とした。
3. 本書の作成において、執筆は以下のように分担して行い、編集は執筆者が行った。なお、朝霞市教育委員会の野沢均氏には、中・近世の遺物についてご教示を頂いた。

尾形則敏 第1章、第2・3章第1節、第2節の遺物（縄文土器以外）、第4章1（2）以外

深井恵子 第2・3章第2節の遺構

青木 修 第2・3章第2節の縄文土器、第4章1（2）

4. 田子山遺跡第81地点・西原大塚遺跡第65地点の石器の実測及び観察表の作成は、（有）アルケールサーチ代表取締役藤波啓容に依頼した。
5. 遺物の実測は、鎌本あけみ・星野恵美子・松浦恵子・山口優子が行った。遺構・遺物のトレースは、深井恵子が行ったが、藤岡智子が一部これに加わった。写真撮影は、青木 修が行った。

6. 調査組織

調査主体者 志木市教育委員会

教 育 長 細田信良

教育政策部長 谷合弘行（平成12年4月～平成15年3月）

〃 白砂正明（平成15年4月～平成16年3月）

〃 杉山 勇（平成16年4月～）

参事兼生涯学習課長 土橋春樹（平成12年4月～平成16年3月）

生涯学習課長 大熊章只（平成16年4月～）

生涯学習課主幹 金子雅佳

〃 下河辺信行（平成14年4月～8月）

生涯学習課主査 関根正明（平成9年4月～平成15年7月）

〃 佐々木保俊

〃 今野美香（平成15年8月～）

生涯学習課主任 尾形則敏

〃 倉部恵子

志木市文化財保護委員 神山健吉（委員長）・井上國夫（副委員長）・高橋長次・

高橋 豊・内田正子

7. 発掘調査及び整理作業参加者

（発掘調査）

調査担当者 尾形則敏

調査員 深井恵子

発掘協力員 遠藤英子・鎌本あけみ・高田美智子・星野恵美子・松浦恵子・山口優子

（整理作業）

調査員 深井恵子

調査補助員 青木 修

整理協力員 遠藤 英子・奥野 恭子・鎌本あけみ・鈴木 浩子・高田美智子・高野 美子・
星野恵美子・松浦 恵子・山口 優子
藤岡 智子（早稲田大学4年生）

8. 各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課・埼玉県立博物館・埼玉県立歴史資料館・埼玉県立さきたま資料館・朝霞市教育委員会・新座市教育委員会・和光市教育委員会・朝霞市博物館・富士見市教育委員会・富士見市立水子貝塚資料館・志木市立志木第四小学校

浅野晴樹・荒井幹夫・石井 寛・飯田充晴・井上洋一・岩田明広・上田 寛・
江原 順・柿沼幹夫・加藤秀之・片平雅俊・隈本健介・栗原和彦・小出輝雄・
肥沼正和・小滝 勉・小宮恒雄・小林寛子・齋藤欣延・笹森健一・笹森紀巳子・
斯波 治・鈴木一郎・鈴木加津子・鈴木重信・隅田 眞・高橋 学・田中広明・
照林敏郎・並木 隆・根本 靖・野沢 均・早坂廣人・廣田吉三郎・福田 聖・
藤波啓容・松本 完・松本富雄・水口由紀子・三田光明・村本周三・村上伸二・
柳井彰宏・山田尚友・和田晋治

田子山遺跡第81地点（開発主体者 個人）

西原大塚遺跡第65地点（開発主体者 個人）

凡 例

1. 本報告書で使用した地図は以下のとおりである。

第1図 1：10,000「志木市全図」アジア航測株式会社調製 平成9年3月志木市1：2,500をデジタルマップにより縮図編集

第2図 1：2,500「志木市№6」東日本航空株式会社・アジア航測株式会社調製 平成8年測量

第8図 1：2,500「志木市№5・6・8・9」を合成 東日本航空株式会社・アジア航測株式会社調製 平成8年測量

2. 挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。
3. 遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。
4. ビット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また、同一遺構内にあるビットでも、おそらく後世のビットと思われるものには、数値を省略した。
5. 遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示し、その番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。
6. 遺構挿図版中のスクリーントーンについては、各挿図版内にその内容を示したが、遺物挿図版中のスクリーントーンは赤彩範囲を示す。
7. 遺構の略記号は、以下のとおりである。

Y=弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡 H=平安時代の住居跡

D=土坑 M=溝跡

目 次

はじめに

例 言

凡 例

目 次

挿図目次

表 目 次

図版目次

第1章 平成14年度の調査成果	1
第1節 市域の地形と遺跡	1
第2節 調査に至る経過	6
第2章 田子山遺跡第81地点の調査	8
第1節 遺跡の概要	8
第2節 検出された遺構と遺物	10
第3章 西原大塚遺跡第65地点の調査	19
第1節 遺跡の概要	19
第2節 検出された遺構と遺物	22
第4章 まとめ	35

図 版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	市域の地形と調査地点 (1/20000)	2
第2図	周辺の地形と調査地点 (1/5000)	8
第3図	遺構分布図 (1/200)	9
第4図	65号住居跡・212号土坑・65号住居跡出土遺物 (1/60・1/4・1/3)	10
第5図	10号溝跡・出土遺物 (1/60・1/4・1/3)	12
第6図	遺構外出土遺物 1 (1/3)	14
第7図	遺構外出土遺物 2 (1/3)	15
第8図	周辺の地形と調査地点 (1/5000)	20
第9図	遺構分布図 (1/200)	21
第10図	371号住居跡 (1/60)	22
第11図	372号住居跡 (1/60)	25
第12図	372号住居跡遺物出土状態 (1/60・1/9)	26
第13図	372号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	27
第14図	373号住居跡 (1/60)	30
第15図	373号住居跡遺物出土状態 (1/60・1/9)	30
第16図	373号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	31
第17図	遺構外出土遺物 (1/3)	32
第18図	10号溝跡想定図 (1/1000)	35
第19図	早期燃糸文系土器の割合	36

表 目 次

第1表	志木市埋蔵文化財包蔵地一覧	1
第2表	平成14年度調査地点一覧 (1)	4
	平成14年度調査地点一覧 (2)	5
第3表	遺構外出土縄文土器一覧	16
第4表	遺構外出土石器一覧	17
第5表	遺構外出土陶器・土器一覧	18
第6表	遺構外出土縄文土器一覧	33
第7表	372号住居跡・遺構外出土石器一覧	33
第8表	遺構外出土陶磁器・土器一覧	33

図 版 目 次

- 図版1 田子山遺跡第81地点
1. 調査区近景 2. 65号住居跡・212号土坑土層断面 3. 65号住居跡
4. 65号住居跡・212号土坑 5. 212号土坑 6. 10号溝跡発掘調査風景
7. 10号溝跡測量風景 8. 10号溝跡土層断面
- 図版2 田子山遺跡第81地点
1. 10号溝跡（北から） 2・3. 10号溝跡（西から） 4. 10号溝跡（東から）
5. 調査区全景（西から）
- 図版3 田子山遺跡第81地点
1. 65号住居跡・10号溝跡出土遺物 2. 遺構外出土遺物
- 図版4 田子山遺跡第81地点
遺構外出土遺物
- 図版5 田子山遺跡第81地点 一 摺糸文系土器の分類一
1. A種 縄文 2. H種 無文
3. B種 摺糸文・文様原体細・施文粗 4. C種 摺糸文・文様原体細・施文密
5. D種 摺糸文・文様原体中・施文粗 6. E種 摺糸文・文様原体中・施文密
7. F種 摺糸文・文様原体太・施文粗 8. G種 摺糸文・文様原体太・施文密
- 図版6 西原大塚遺跡第65地点
1. 発掘調査風景 2. 371号住居跡 3・4. 372号住居跡遺物出土状態
5. 372号住居跡炉 6. 372号住居跡貯蔵穴付近
7. 372号住居跡貯蔵穴・入口ピット 8. 372号住居跡
- 図版7 西原大塚遺跡第65地点
1. 発掘調査風景 2～6. 373号住居跡遺物出土状態 7. 373号住居跡炉
8. 373号住居跡
- 図版8 西原大塚遺跡第65地点
1. 372号住居跡出土遺物 2. 373号住居跡出土遺物
- 図版9 西原大塚遺跡第65地点
1. 372Y-1 2. 372Y-2 3. 372Y-3 4. 372Y-7
5. 372Y-8 6. 373Y-1 7. 373Y-2 8. 373Y-4
- 図版10 西原大塚遺跡第65地点
遺構外出土遺物

第1章 平成14年度の調査成果

第1節 地域の地形と遺跡

志木市は、埼玉県南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71 km、東西4.73 kmの広がりをもち、面積は9.06 km²、人口約6万6千の自然と文化の調和する都市である。

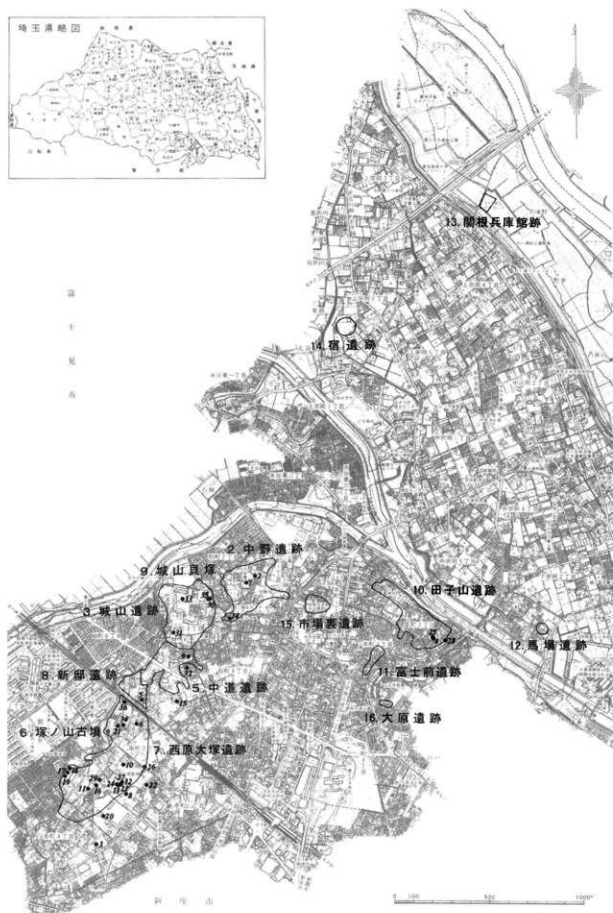
地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が広がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の3本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、西原大塚遺跡をはじめ市域の大部分の遺跡は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に存在している。遺跡は柳瀬川上流から、西原大塚遺跡（7）、中道遺跡（5）、新邸遺跡（8）、城山遺跡（3）、中野遺跡（2）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）の順に名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）のように自然堤防上に存在する遺跡も明らかにされつつあり、将来的には新たな遺跡が相次いで発見される可能性がある。なお、市内の遺跡総数は、現在前述した12遺跡に塚ノ山古墳（6）、城山貝塚（9）を加えた14遺跡である（第1図）。

No.	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2	中野	59,400m ²	畑・宅地	集落跡	旧石器・縄(早～晩)、弥(後)、古(前～後)、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城山	78,700m ²	畑・宅地	竊跡跡・集落跡	縄(早～晩)、弥(後)、古(前～後)、奈・平、中・近世	住居跡、土坑、井戸跡、溝跡、竊跡跡、土坑、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
5	中道	45,100m ²	畑・宅地	集落跡	旧石器・縄(前～後)、弥(後)、古(前～後)、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、人骨等
6	塚ノ山古墳	800m ²	林	古墳?	古墳?	未調査	未調査
7	西原大塚	163,100m ²	畑・宅地	集落跡	旧石器・縄(前～晩)、弥(後)、古(前～後)、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭等
8	新邸	16,400m ²	畑・宅地	貝塚・集落跡	縄(早～中)、古(前)、中・近世	住居跡、土坑、井戸跡、溝跡、段状遺構、ピット群等	石器、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9	城山貝塚	900m ²	林	貝塚	縄(前)	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10	田子山	60,100m ²	畑・宅地	集落跡	縄(早～晩)、弥(後)、古(後)、奈・平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形周溝墓、ローマ銭、須恵器、溝跡等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11	富士前	7,100m ²	宅地	集落跡	弥(後)～古(前)	住居跡	弥生土器、土師器
12	馬場	2,800m ²	畑	集落跡	古(前)	住居跡?	土師器
13	関根兵庫館跡	4,900m ²	グラウンド	館跡	中世	未調査	未調査
14	宿	7,700m ²	田	館跡	中世	溝跡・井桁状構造物	木・石製品
15	市場裏	10,700m ²	宅地	集落跡・竊跡	弥(後)～古(前)、近代	住居跡・方形周溝墓	弥生土器、土師器
16	大原	1,700m ²	宅地	不明	近世以降?	溝跡	なし
合計		459,400m ²					

平成16年8月31日現在

第1表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覽



第1図 市城の地形と調査地点 (1/20000)

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

志木市内に最初に人が住みついたのは、**旧石器時代**からで、この時代の遺跡としては、柳瀬川右岸の西原大塚・中道・城山・中野遺跡がある。中道遺跡では、昭和62(1987)年の富士見・大原線(現ユリノキ通り)の工事に伴う調査により、立川ローム層のⅣ層上部・Ⅴ層・Ⅵ層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパー・ナイフ形石器や安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

平成11～14年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からも立川ローム層のⅣ層下部から、黒曜石・頁岩の石材の石核・剥片が約60点出土している。

縄文時代になると、草創期では、平成4年度に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器1点、平成10年度の田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器1点が出土している。

早期では、田子山遺跡から撚糸文・沈線文・条痕文系土器が、新邸・富士前・城山遺跡から撚糸文系土器が数点出土している。住居跡としては、西原大塚・新邸遺跡の前期黒浜式期のものが最古に位置付けられ、それぞれ1軒検出されている。そのうち、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。また、平成2年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

遺跡が最も増加するのは、中期中葉から後葉の勝坂式～加曾利E式期である。平成5年度以降、西原大塚遺跡内には西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査が本格的に実施され、多くの遺構が検出されている。特に住居跡はその分布状況から、環状に配置する可能性のあることが指摘されている。その他、中道・城山・中野・田子山遺跡からも住居跡・土坑などが発見されている。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡が1軒確認されるのみである。

さらに後期では、報告書として刊行された住居跡は皆無であるが、西原大塚遺跡から後期の堀之内式期の住居跡1軒と加曾利B式期の住居跡1軒、遺物集中地点1ヶ所が検出されている。また、その他の遺構としては、田子山遺跡第31地点において、土坑1基が検出され、下層から称名寺I式期の土器、上層からⅡ式の特徴をもつ土器が出土している。西原大塚遺跡第54地点でも1基の土坑が検出されている。

晩期になると、中野・田子山遺跡から安行ⅢC式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では遺跡が希薄になる傾向にある。平成12年度の西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査では、晩期のもと思われる溝跡1本が検出されている。

弥生時代では、現在のところ、前・中期に遡る遺跡は存在しない。大部分が後期末葉から古墳時代前期にかけての遺跡であろうと考えられる。その中で、田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子(イネ・アワ・ダイズなど)、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、志木市史にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が200軒以上確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは、全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。

当時の墓域の可能性として、方形周溝墓が、昭和62(1987)年以降、西原大塚・市場裏・田子山遺跡の3遺跡から相次いで確認されており、集落跡との関連の中で今後注目されるであろう。古墳時代前期では、

番号	調査地点	所在地	調査原因	面積(㎡)	確認調査日	発掘期間	備考
1	西原大塚遺跡	幸町3丁目 3038-13他77筆	区画整理事業	6,177.00		H14.6.4~ H15.3.20	発掘調査は志木市道跡調査 会が実施
		幸町3丁目3098,3099, 3100-1-2-5の一部		181.80		11.25-12.20	
		幸町3丁目3213の 一部、3214の一部		922.00		H15.3.11~ 3.31	
2	中野遺跡 第60地点	柏町1丁目 1488-20	分譲住宅建設	132.62	4.23		遺構・遺物は検出されなかった
3	西原大塚遺跡 第64地点	幸町4丁目 3404-1	共同住宅建設	492.00	4.24		遺構・遺物は検出されなかった
4	田子山遺跡 第81地点	本町2丁目 1744-3	個人住宅建設	89.62	5.30	6.10-6.27	後述 第2章参照
5	新邸遺跡 第8地点	柏町5丁目 3020-1-2-10	共同住宅建設	471.41	6.7	H15.6.16~ 8.7	発掘調査は平成15年度に志 木市道跡調査会が実施
6	西原大塚遺跡 第65地点	幸町2丁目 3042-1	個人住宅建設	115.93	7.25	7.26-8.9	後述 第3章参照
7	中野遺跡 第49地点	柏町1丁目1503-1	変電所増設工事	80.00		8.20-9.4	第5行程 平成11年度から継 続 発掘調査は志木市道跡 調査会が実施
8	西原大塚遺跡 第66地点	幸町3丁目 3205,3217-1の一部	個人住宅建設	339.13	8.26		遺構・遺物は検出されなかった
9	中道遺跡 第58地点	柏町5丁目 2950-5	共同住宅建設	757.32	8.27		遺構・遺物は検出されなかった
10	西原大塚遺跡 第67地点	幸町3丁目 3228	個人住宅及び 物置建設	456.20	9.9	9.11-11.29	発掘調査は教育委員会が実 施したが、報告書発行は次号 予定
11	西原大塚遺跡 第68地点	幸町3丁目 3133-1	個人住宅建設	97.52	9.17		盛土保存適用
12	西原大塚遺跡 第69地点	幸町3丁目 3214,3215,3216の一部	個人住宅建設	109.37	10.2		盛土保存適用
13	西原大塚遺跡 第70地点	幸町3丁目 3212-1-4-6	共同住宅建設	534.47	10.15	10.31-11.27	発掘調査は志木市道跡調査 会が実施
14	中野遺跡 第61地点	柏町3丁目 2589-2	個人住宅建設	321.52	10.16		遺構・遺物は検出されなかった
15	中道遺跡 第59地点	柏町5丁目 2907-20他6筆	個人住宅建設	560.07	10.22		遺構・遺物は検出されなかった
16	西原大塚遺跡 第71地点	幸町3丁目 3137-5	個人住宅建設	100.14	10.25		盛土保存適用
17	西原大塚遺跡 第72地点	幸町3丁目 3100-1~5の各一部	農地土壌改良	1,171.00		11.20-12.20	発掘調査は志木市道跡調査 会が実施
18	西原大塚遺跡 第73地点	幸町3丁目 3099の一部	農地土壌改良	315.00		11.20-12.20	発掘調査は志木市道跡調査 会が実施
19	西原大塚遺跡 第74地点	幸町3丁目 3098他4筆の一部	区画整理事業に 伴う擁壁建設	181.80		11.20-12.20	発掘調査は志木市道跡調査 会が実施
20	西原大塚遺跡 第75地点	幸町3丁目 3139-1, 3171-1	個人住宅兼 作業所建設	228.48	11.1		遺構・遺物は検出されなかった
21	西原大塚遺跡 第76地点	幸町2丁目 3037, 3079	個人住宅建設	48.85	11.12		遺構・遺物は検出されなかった
22	西原大塚遺跡 第77地点	幸町3丁目 3245-9の一部	個人住宅建設	100.38			現地踏査は11月25日実施
23	西原大塚遺跡 第78地点	幸町3丁目 3211-5	個人住宅建設	122.39	11.27		盛土保存適用
24	西原大塚遺跡 第79地点	幸町3丁目 3164, 3212-2他1筆	個人住宅建設	74.52			現地踏査は11月27日実施 盛土保存適用
25	田子山遺跡 第82地点	本町2丁目 1744-1-12	個人住宅建設	176.55	12.5		遺構・遺物は検出されなかった
26	西原大塚遺跡 第80地点	幸町3丁目 3243-2-3	個人住宅建設	85.75	12.12		遺構・遺物は検出されなかった
27	西原大塚遺跡 第81地点	幸町3丁目 3214-1の一部他2筆	個人住宅建設	105.91	12.12		盛土保存適用
28	田子山遺跡 第83地点	本町2丁目 1676-2	個人住宅建設	95.99			現地踏査は12月18日実施 遺構・遺物は検出されなかった

第2表 平成14年度調査地点一覧(1)

番号	調査地点	所在地	調査原因	面積 (㎡)	確認調査日	発掘期間	備 考
29	西原大塚遺跡第82地点	幸町3丁目3165-1	分譲住宅建設	577.39	H15.1.30		遺土保存適用
30	城山遺跡第45地点	柏町3丁目2599-1	個人住宅建設	100.00	1.31		遺構・遺物は検出されなかった
31	城山遺跡第46地点	柏町3丁目2644-3・5	個人住宅建設	348.29	2.18	H15.2.28～4.30	発掘調査は教育委員会が実施したが、報告書刊行は次号以降予定
32	中道遺跡第60地点	柏町5丁目2950-41・42・44・64	共同住宅建設	259.69	2.25		遺構・遺物は検出されなかった
33	城山遺跡第47地点	柏町3丁目2608,2609,2624	仮設校舎建設	1,200.00			現地踏査は2月21日実施
34	西原大塚遺跡第83地点	幸町2丁目3040-4	個人住宅建設	78.00	3.10		遺構・遺物は検出されなかった
35	城山遺跡第48地点	柏町3丁目2599-5	個人住宅建設	100.00			現地踏査は3月14日実施
36	西原大塚遺跡第84地点	幸町2丁目3016-4、3017-1	物置建設	179.01			現地踏査は3月20日実施
合 計				17,487.12			

第2表 平成14年度調査地点一覧(2)

特に西原大塚遺跡10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に、畿内系の庄内式の長脚高坏が出土していることに注目される。平成11年度に西原大塚遺跡第45地点で発見された一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が特筆すべきであろう。この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土器をはじめ、畿内系の有段口緑壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺が出土しており、こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

最新では、平成15年6～8月に発掘調査が実施された新邸遺跡第8地点から、古墳時代前期に比定される住居跡8軒・方形周溝墓が1基検出されている。方形周溝墓については、遺跡名は異なっても墓群の中心をもつ西原大塚遺跡から見れば北東端に含まれるものと考えられることができる。ただし、集落跡の様相から察すると、新邸遺跡第2地点から古墳時代前期終末から中期に比定される住居跡1軒が検出されていることから、現時点では西原大塚遺跡から継続して集落が広がったものではないかと推測される。

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する。中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。特に中道遺跡第37地点の19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、市内最古のカマドをもつ住居跡として注目される。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に6世紀後半から7世紀後半にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、6世紀後半以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

平成15年には、新邸遺跡でも初めて7世紀代の住居跡が1軒検出されている。この住居跡は、3×3.5mの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、5世紀後半から7世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で120軒を越え、次いで中野遺跡で約50軒、中道遺跡で約15軒、田子山遺跡で約10軒、新邸遺跡で1軒を

数える。また、田子山遺跡第24地点では、6世紀後半以降のものと考えられる4.1×4.7mのやや不整形で2ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されている。

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、田子山遺跡は、この時代の代表とする遺跡として挙げることができる。この遺跡では、住居跡の他、掘立柱建物遺構、溝跡、100基を越える土坑群が確認されている。遺物としては、土器・灰釉陶器の他、腰帯の一部である銅製の丸鞘、鉄製の紡錘車・刀子などが出土している。

また、平安時代の城山遺跡第35地点の128号住居跡からは、印面に「富」1文字が書かれた銅製の印章が出土したことに注目される。この住居跡からはその他、猿投産の緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。

中・近世では、柏城跡を有する城山遺跡と関根兵庫館跡が代表される遺跡である。特に、柏城跡内での数次にわたる発掘調査により、『館村日記』にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。また、城山遺跡第29地点の127号土坑から馬の骨が検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）も出土しており、特に、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。さらに、第35地点では、鑄造関連の遺構も検出されている。130号土坑については鑄造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鑄型、三叉状の土製品、砥石などが出土している。

また、平成11～14年度にかけて実施された中野遺跡第49地点の調査から、頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑が検出されている。その他、ピット列・土坑・溝跡などが検出されていることから、この一帯が『館村日記』に記載されている「村中の墓場」関連に相当する施設ではないかと考えられる。

近代以降の遺跡では、19世紀以降の溝跡・地下室などが、城山遺跡を中心に検出されているが、田子山遺跡の第31地点では、敷島神社境内に存在する富士塚の築造（明治2～5年）に関連するローム採掘遺構が検出されており、地域研究の重要な資料であると言える。

第2節 調査に至る経過

志木市は、都心から25km圏内に位置し、東武東上線志木～池袋駅間を急行で20分という交通の便に恵まれ、都心近郊のベッドタウンとして発展してきた。近年の都市化に伴い、各種の開発行為も増大してきたが、とりわけ住宅建設の占める割合が高く開発による遺跡破壊が進行する状況にある。また、遺跡の集中する本町・柏町・幸町地区は都市化の最も進展する地域になっていることも遺跡破壊の事態を一層大きくしていると言える。

こうした状況の中、志木市教育委員会では文化財行政を進めていくために、埋蔵文化財を保護・保存していくことが重要な課題となっている。しかしながら、開発により遺跡の現状保存が困難な状況であり、記録保存という処置によって対処しているのが現状である。

ここで、志木市における発掘調査の経過を振り返ってみると、まず、1973（昭和48）年に西原大塚遺跡において発掘調査が実施されたのが最初の調査であろう。そして以後、1982（昭和57）年までは、志木市史編さん事業に伴う学術的な発掘調査が実施されていた。1983（昭和58）年には、志木市において

遺跡調査会が組織され、1985（昭和60）年には本市にとって最大規模の調査となった城山遺跡第1地点の調査が実施された。この調査は、市内における発掘調査体制の本格的組織化の契機となり、以降志木市の埋蔵文化財保護を推進する上で大きな転換となったと言える。

そうした中、本市における開発行為、特に住宅建設については小規模のものが多くことから、こうした小規模の開発にも対応する必要があった。しかし、小規模な開発の当事者は個人で、その個人が専用に使用する住宅の建設についての記録保存の実施については、費用の負担など記録保存を進める上で困難な点が多かった。そのため、1987（昭和62）年以降、国・県よりの補助金の交付を受け、志木市教育委員会を主体とした発掘調査を実施することになったのである。さらに、民間・公共事業を問わず確認調査については、すべて公費で対応し、開発事業者の負担軽減と埋蔵文化財包蔵地の詳細な分布状況の把握を積極的に進めている。特に、発掘調査件数及び面積が、1987（昭和62）年以降急激に増加しているのは、こうした理由によるものと考えられる。

最近では、昭和40年前後の人口増加が始まった頃に建設された個人住宅の建て替えも多くなってきており、平成2年度以来、個人住宅建設に伴う調査件数が増加してきている。また、平成8年度は全体の調査件数及び面積が激減しているが、教育委員会で行った発掘調査の件数については逆に過去最高の8件を越え9件にのぼり増加したという現象が生じた。これについては、平成7年度に調査対象区域の見直しを行ったことが影響したものと考えられる。その見直しの内容は、今まで「遺跡の存在する可能性が高い地域」でも発見が全く無かった地域を過去の調査成果により割り出し、その地域については「将来遺跡が発見される可能性がある地域」に変更したというものである。なお、平成9年度より、遺跡の現状保存を目的とするため、遺跡の盛土保存を適用とした制度を導入するに至っている。

平成10年度以降は、西原大塚遺跡内における個人住宅建設を中心とした各種開発が著しい増大を見せている。これは、平成5年度以降、西原大塚遺跡内では土地区画整理事業が開始され、これに伴い発掘調査が実施されているが、工事の完了後に伴う周辺地域の開発が始まったためと考えられる。今後は、この地域の開発については、市内の他地域よりも増大されることが必至であろうと予想されるため、埋蔵文化財保存事業についても充分留意しなくてはならないであろう。

なお、教育委員会は、平成15年1月、今までに集積された調査データに基づいて、遺跡の存否及び範囲について大々的に修正を行った。これにより、市場遺跡・氷川前遺跡の2遺跡の削除と中野・城山・中道・西原大塚・新邸・田子山・富士前・市場裏遺跡の8遺跡の一部範囲が縮小され、市内遺跡総数は14遺跡に変更されることになった。同時にこれは、手続き上に係る事務量の削減と確認調査に使用する重機のコスト削減を目的とし、効率的な事業の運営を図ったものであった。

平成14年度は36件の確認・発掘調査等を実施した。そのうち、志木市教育委員会が実施した発掘調査は4件で、志木市遺跡調査会が実施した発掘調査は7件であった。なお、盛土保存を適用したのは7件であった。

工事内容の内訳件数は、個人専用住宅20件、共同住宅5件、分譲住宅2件、農地土壌改良2件、区画整理事業2件、個人住宅及び物置建設1件、個人住宅兼作業所建設1件、物置建設1件、変電所増設工事1件、仮設校舎建設1件である。

註1 『館村日記』は、館村（現在の志木市柏町・幸町・館）の名主宮原仲右衛門仲恒が、享保12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。

第2章 田子山遺跡第81地点の調査

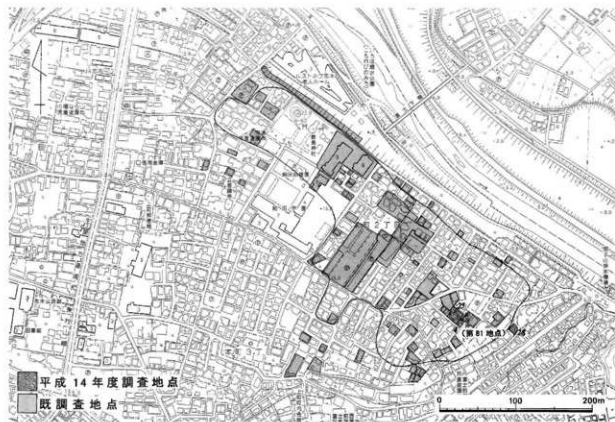
第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

田子山遺跡は、志木市本町2丁目を中心に存在する遺跡で、東武東上線志木駅の北東約1.3kmに位置している。遺跡範囲内には敷島神社・御嶽神社・細田学園などの比較的に目立つ対象物が存在するが、遺跡全体の印象は、概して個人住宅を中心とする住宅密集地と言えるであろう。遺跡は北西-南東方向に約500m、北東-南西方向に約150mほどの広がりを持ち、面積は平成15年1月、今までの調査データを基に65,000㎡から60,100㎡に変更された。

遺跡を地勢的に見ると、武蔵野台地の北端部にあたり、標高約15m、低地との比高差約10mを測り、崖線部はかなり際立った断崖地形になっている。遺跡のすぐ北側の崖下には、舟運で有名な新河岸川が南東流し、また遺跡の東側には大きな谷が入り込んでおり、本遺跡の東端はこの開折谷に面している。近年この東端周辺から、縄文時代早期の燃糸文・沈線文・条痕文系土器が遺構外であるが出土する傾向が多いことから、今後は集落跡に関連する住居跡等の検出に期待される。

本遺跡は、昭和63年に第1回目の発掘調査が実施され、以後の調査から、縄文時代草創期～晩期、弥生時代後期、古墳時代後期、奈良・平安時代、中・近世、近代の複合遺跡であることが判明している。



第2図 周辺の地形と調査地点 (1/5000)

(2) 発掘調査の経過

確認調査は、平成14年5月30日に実施した。調査区の長軸方向に合わせ2本のトレンチを設定し、バックホーを使用し表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、溝跡と考えられる遺構1基を確認した。

そのため、ただちに立会人の代理業者に調査の結果を報告し、保存のための協議を行った。保存対策については、一度依頼者(個人)と検討してから、再度連絡するということになり、教育委員会はその回答を待つことにした。その後、依頼者から計画を変更することは不可能であるという回答を得た。同時に、教育委員会に発掘調査の依頼があったため、教育委員会ではこれを受理し、発掘調査を実施することに決定した。

6月10日、重機による表土剥ぎを開始する。しかし、調査区域内に残土置場を確保できないという理由から、同日午後には排土をダンプに積載し、調査区域外に搬出することにした。その作業は翌11日に終了した。遺構精査分の当面の残土置場については、遺構の分布しない調査区西端に当てる予定とした。

人員導入による発掘調査は、10日午後から開始した。まず、器材の搬入作業を行い、その後、調査区域内の整備と細部の遺構確認作業を行った。その結果、調査区域内には、溝跡1条(10M)が調査区東端に存在することが明らかになった。

11日から10Mの精査を開始する。遺物の取り上げは、便宜的におよそ南北を2分するように中央付近に土層観察用ベルトを設定し、その北側を1区、南側を2区とした。遺物としては、平安時代の須恵器坏を中心に縄文早期の燃糸文系土器の小破片が出土している。また、深さは東側に行くにつれて徐々に深くなっており、深いところでは1mピンボールが届かない状況であった。

12日以降は10Mの掘り下げを継続する。遺物の取り上げ用に設定したベルトは、該期の遺物が不安定な出土状況であったため、不要のものと判断し除去することにした。

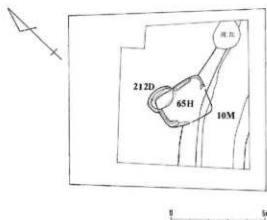
13日、10Mに重複し、長方形を呈する212号土坑(212D)を検出する。時期については、平安時代(9世紀後半)の須恵器小破片が若干出土したことから、平安時代に比定した。

14日、10Mは土層区終了後、溝底面まで精査完了する。その後長軸エレベーション実測を終了する。また、212Dの精査中に別の土坑(213D)を検出したため、精査を開始した。213Dについては、とにかく深く検出時では1mピンボールが届かなかった。

17日、10Mは遺構の平板測量を開始する。212Dは若干の床硬化面とカマドの痕跡と思われる焼土範囲がみられたため、住居跡(65H)として扱うことにした。213Dを212Dに変更する。65H・212Dは完掘後平板測量・エレベーション実測を開始する。

18日は雨天にて中止。19日は10M・65H・212Dの実測をすべて終了し、その後調査区全体の写真撮影を行い、すべての調査を完了した。同日には器材の片付け・搬出作業を終了する。

埋戻し作業は、26日に開始し、27日に完了した。



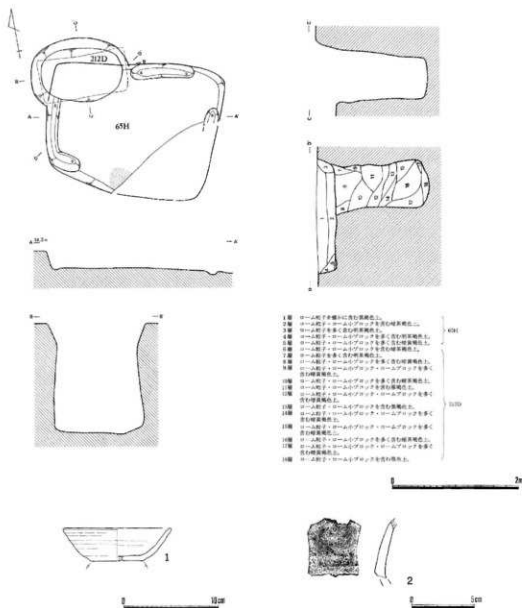
第3図 遺構分布図(1/200)

第2節 検出された遺構と遺物

(1) 住居跡

65号住居跡 (第4図)

〔住居構造〕212D・10Mを切ると思われるが、これらと重複する北西と南東のコーナーは確認できなかった。(平面形)長方形。(規模)2.70×2.10m。(壁高)24~29cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝)北東コーナーと南壁には確認出来なかった。上幅18~26cm・下幅6~12cm・深さ4~6cmを測る。(床面)ほぼ直床で、特に硬化した面は確認出来なかった。南側の壁に近い床面が一部焼けて赤化していた。(柱穴)検出されなかった。(覆土)5層に分層される。



第4図 65号住居跡・212号土坑・65号住居跡出土遺物 (1/60・1/4・1/3)

[遺物] 須恵器坏・長頸瓶が出土した。

[時期] 平安時代（9世紀後半）。

65号住居跡出土遺物（第4図1・2）

1は須恵器坏形土器である。器高3.6cm・推定口径11.4cm・推定底径5.5cm。ロクロ回転は右回転で、底部には回転糸切り痕が残る。色調は灰褐色を呈し、胎土には砂粒・小石（長石）を含む。覆土中からの出土で、遺存度は1/5程である。

2は須恵器長頸瓶の頸部小破片であろう。色調は灰褐色を呈し、胎土には砂粒・白色砂粒（長石）を含む。覆土中からの出土である。

（2）土坑・溝跡

212号土坑（第4図）

[構造] 65Hに切られているため、南側の上部は不明である。（平面形）上部は楕円形で、底部は長方形を呈する。（規模）1.56m×不明。確認面から20cm程下がった所で1.28×0.84mの楕円形にすばまり、底部は1.40×0.80mを測る。（長軸方位）E-W。（深さ）確認面より1.75mを測る。坑底は比較的平坦である。（覆土）13層に分層される。

[遺物] 該当するものはなかった。

[時期] 平安時代か。

10号溝跡（第5図）

[構造] ごく一部のみの調査のため詳細は不明である。断面は葉研堀状を呈し、壁は北側（外側）は緩やかに、南側（内側）は急斜に立ち上がる。坑底は東側から西側に緩やかに下がっており、高低差は88cm、確認面からの深さは一番深い西側で160cmを測る。坑底と思われた面は比較的平坦であったが、最下層の黄褐色ローム（31層）が貼床状に貼られており、これを剥がしたあとのローム面は凸凹していた。（覆土）27層に分層される。

[遺物] 須恵器坏・甕と鉄製品が出土した。

[時期] 平安時代か。

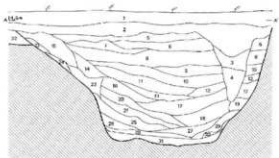
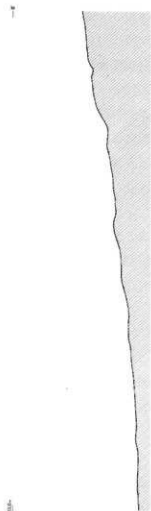
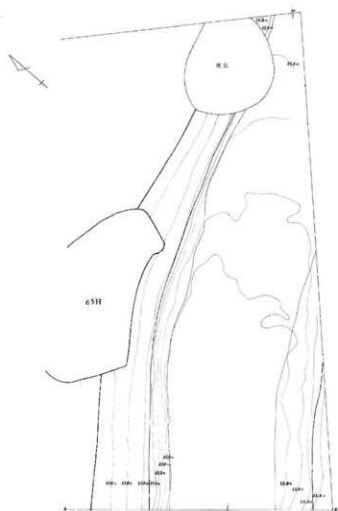
[所見] 安定した遺物は得られなかったが、御嶽神社を囲むように巡らされていると思われる。古墳の周溝の可能性もあるが、結論は今後の調査成果を待って考えることにしたい。

10号溝跡出土遺物（第5図1～5）

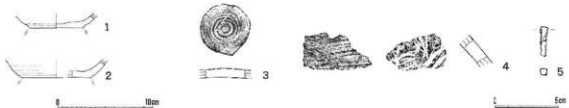
1・2は須恵器坏形土器の体部下半から底部にかけての破片である。いずれも覆土中からの出土である。1は現器高1.6cm・底径5.8cm。ロクロ回転は右回転で、底部には回転糸切り痕が残る。色調は暗灰褐色を呈し、胎土には白色砂粒を含む。2は酸化炎焼成の上器である。現器高2.0cm・推定底径7.2cm。ロクロ回転は右回転で、底部には回転糸切り痕が残る。色調は暗赤褐色を呈し、胎土に白色砂粒を含む。

3は刻書土器である。須恵器坏形土器の底部破片で、刻書は底部内面に施される。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。

4は須恵器甕形土器の胴部小破片である。色調は灰褐色を呈し、胎土には白色の砂粒・小石（大きなもので5×10mm）を含む。内面には当て道具痕（青海波）、外面には叩き道具痕（縄文）が観察される。外面はその後カキ日調整が施される。覆土中からの出土である。



- 1層 遺土。
 2層 遺土。
 3層 ①-1粘土・礫を含む厚層状土。 } 溝底の層下部分
 4層 ①-2粘土層に礫が散在した土。
 5層 ①-1粘土層に礫が散在した土。
 6層 ①-1粘土層に礫が散在した土。
 7層 ①-1粘土層に礫が散在した土。
 8層 ①-1粘土層に礫が散在した土。
 9層 ①-1粘土層に礫が散在した土。
 10層 ①-1粘土層に礫が散在した土。
 11層 ①-1粘土層に礫が散在した土。
 12層 ①-1粘土層に礫が散在した土。
 13層 ①-1粘土層に礫が散在した土。
 14層 ①-1粘土層に礫が散在した土。
 15層 ①-1粘土層に礫が散在した土。
 16層 ①-1粘土層に礫が散在した土。
 17層 ①-1粘土層に礫が散在した土。
 18層 ①-1粘土層に礫が散在した土。
 19層 ①-1粘土層に礫が散在した土。
 20層 ①-1粘土層に礫が散在した土。



第5図 10号溝跡・出土遺物 (1/60・1/4・1/3)

5は鉄製品（鉄釘）である。長さ2.4cm・幅0.6cm・重さ1.0g。覆土中からの出土である。

（3）遺構外出土遺物

遺構外の遺物として、縄文時代早・前・中期の土器及び石器、弥生時代の土器、また中・近世の遺物が出土した。以下、第1群から第3群に分類し説明する。

第1群 縄文時代の遺物（第6・7図1～60、第3・4表）

縄文時代の遺物は早期の土器を主体として出土しており、とりわけ早期前半の燃糸文系の土器が目立ったがいずれも小破片であり型式の特定できるものは少なかった。ここでは土器、石器をまとめてI～V類の5類に分類し、燃糸文系については文様、原体によりA～H種の8種に細分した。分類の詳細は以下の通りである。

I類 早期前半燃糸文系土器群（第6図1～40、第3表）

早期燃糸文土器群については文様、原体によりA～H種の8種に分類した。詳細な型式については不明なものが多いが稲荷台・稲荷原式期のものが主体と思われ、一部に大丸式や花輪台式の要素を持つものがみられた。

A種 縄文施文されるもの

1はほぼ口唇部のみ破片で肥厚の状態等の詳細は不明であるが、上端面と側面最上部に5mm幅のRLの縄文が施文され以下はRの燃糸と思われる文様が施文される。大丸式か？。2は口縁部はあまり肥厚せず外反し、Rの縄文が縦位に施される。3の口縁部はやや肥厚し外反する。RLの縄文が縦位に施される。2・3は稲荷台式と思われる。4は口縁上端1cmが外側に屈曲し頸部にはLRの縄文が押し込まれる。花輪台式と思われる。5～8は胴部片である。

B種 燃糸文・文様原体細（1mm未満）・施文粗（燃糸の間隔が原体の太さを超える）

9は口縁部が肥厚しほぼ直立する。Rの燃糸文が縦位施文され細線の混入が顕著である。この細線は他の土器片の細線に比して明らかに角が立ち、風化や流水による円磨作用が認められないため、人為的に破砕された細線である可能性も考えられる。稲荷台式。10・11は胴部片でいずれもRの燃糸文が施文される。

C種 燃糸文・文様原体細（1mm未満）・施文密（燃糸の間隔が原体の太さ以下）

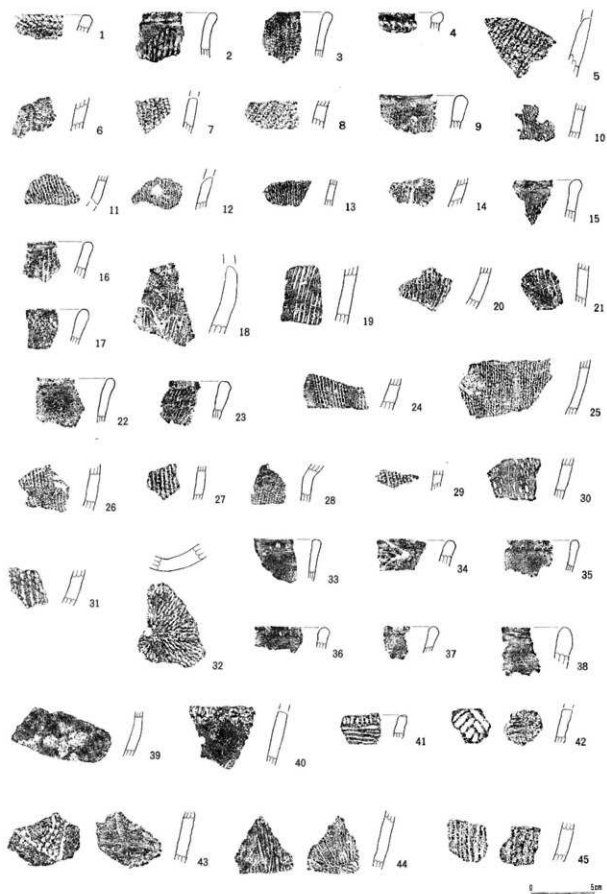
12～14はいずれも胴部片でRの燃糸文が縦位に施文される。

D種 燃糸文・文様原体中（1mm～2mm未満）・施文粗（燃糸の間隔が原体の太さの2倍を超える）

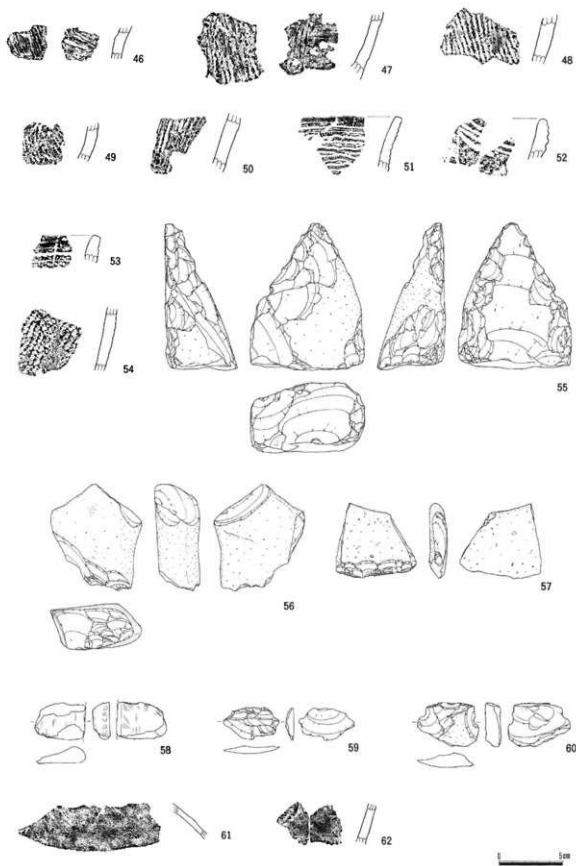
15・16は口縁部はほとんど肥厚せずほぼ直立する。両者ともRの燃糸文を縦位施文する。17は口縁部がやや肥厚し、ほぼ直立する。Lの燃糸文が縦位施文される。18は口唇部の輪積みが剥離している。Lの燃糸文が施文されるが文様の節が著しく長い。15～17は稲荷台式。19～21は胴部片で、いずれもRの燃糸文が縦位に施されるが、19については撚りの（縦維の）方向は認められるものの明確な節を確認することができないためr0段の糸を用いた可能性も考えられる。

E種 燃糸文・文様原体中（1mm～2mm未満）・施文密（燃糸の間隔が原体の太さの2倍以下）

22は口縁部がやや肥厚し緩やかに外反する。上部約2cmは無文で横位にナデ調整の跡が認められ、以下はLの燃糸文が施文される。23は口縁部がやや肥厚しほぼ直立する。Lの燃糸文が施文され、細線の混入が顕著である。24～27はRの燃糸文を有する胴部片。28・29はLの燃糸文を有する胴部片であるが、28はごく口縁に近く上部が無文で外反している。



第6图 遺構外出土遺物1(1/3)



第7図 遺構外出土遺物 2 (1/3)

標本番号	部位	文様・特徴など	色調	分類	胎土	備考
第6図1	口縁	口唇部に縄文RL。以下は燃赤Rか?	明褐色	A種(縄文)	砂粒	
第6図2	口縁	縄文R・縦位	暗褐色	A種(縄文)	砂粒	
第6図3	口縁	縄文RL・縦位	暗褐色	A種(縄文)	白色粒子	10M
第6図4	口縁	頸部に縄文LR押正	暗褐色	A種(縄文)	白色粒子・砂粒	10M
第6図5	胴	縄文RL・縦位	明褐色	A種(縄文)	白色粒子・砂粒	輪積み痕
第6図6	胴	縄文RL・斜位	褐色	A種(縄文)	砂粒	10M
第6図7	胴	縄文RL・斜位	明褐色	A種(縄文)		10M
第6図8	胴	縄文LR・横位	褐色	A種(縄文)	砂粒	10M
第6図9	口縁	燃赤R・縦位	褐色	B種(細-密)	細礫・砂粒	
第6図10	胴	燃赤R・縦位	褐色	B種(細-粗)	角閃石・白色粒子・砂粒	212D
第6図11	胴	燃赤R・斜位	褐色	B種(細-粗)	白色粒子・砂粒	10M
第6図12	胴	燃赤R・縦位	暗褐色	C種(細-密)		10M
第6図13	胴	燃赤R・縦位	褐色	C種(細-密)	細礫・砂粒	10M
第6図14	胴	燃赤R・縦位	赤褐色	C種(細-密)	砂粒	65H・212D
第6図15	口縁	燃赤R・縦位	黒褐色	D種(中-粗)	砂粒	10M
第6図16	口縁	燃赤R・縦位	褐色	D種(中-粗)	角閃石・砂粒	10M
第6図17	口縁	燃赤L・縦位	暗褐色	D種(中-粗)	白色粒子・砂粒	212D
第6図18	口縁?	燃赤L・斜位	暗褐色	D種(中-粗)	角閃石・砂粒	輪積み痕
第6図19	胴	燃赤R・縦位	明褐色	D種(中-粗)	砂粒	10M
第6図20	胴	燃赤R・縦位	褐色	D種(中-粗)		10M
第6図21	胴	燃赤R・縦位	明褐色	D種(中-粗)	角閃石・白色粒子・砂粒	10M
第6図22	口縁	燃赤L・縦位	褐色	E種(中-密)	砂粒	212D
第6図23	口縁	燃赤L・斜位	褐色	E種(中-密)	白色粒子・砂粒	
第6図24	胴	燃赤R・斜位	褐色	E種(中-密)	白色粒子	10M
第6図25	胴	燃赤R・縦位	褐色	E種(中-密)	砂粒	
第6図26	胴	燃赤R・縦位	褐色	E種(中-密)		10M
第6図27	胴	燃赤R・縦位	明褐色	E種(中-密)	砂粒	
第6図28	胴	燃赤L・縦位	明褐色	E種(中-密)	細礫・白色粒子・砂粒	
第6図29	胴	燃赤L・縦位	明褐色	E種(中-密)		10M
第6図30	胴	燃赤R・縦位	褐色	F種(太-粗)	白色粒子・細礫・砂粒	212D
第6図31	胴	燃赤R・縦位	明褐色	F種(太-粗)	細礫・砂粒	10M
第6図32	底	燃赤R・縦位	明褐色	G種(太-密)	砂粒	10M
第6図33	口縁	無文	褐色	H種	砂粒	10M
第6図34	口縁	無文	明褐色	H種	白色粒子	10M
第6図35	口縁	無文	明褐色	H種	白色粒子・砂粒	10M
第6図36	口縁	無文	明褐色	H種		212D
第6図37	口縁	無文	褐色	H種	白色粒子・細礫・砂粒	212D
第6図38	口縁	無文	灰褐色	H種	砂粒	10M
第6図39	胴	無文	暗赤褐色	H種	砂粒	10M
第6図40	胴	無文	明褐色	H種		10M 輪積み痕
第6図41	口縁	貝殻条痕文	暗赤褐色		繊維・白色粒子・砂粒	10M
第6図42	胴	織紗状凹線文・内面貝殻条痕文	褐色		繊維	10M
第6図43	胴	沈線による櫛状モチーフ内磨き・半月状刻突	灰褐色		繊維・白色粒子・砂粒	10M
第6図44	胴	貝殻条痕文	暗赤褐色		繊維・白色粒子・角閃石	10M
第6図45	胴	貝殻条痕文	褐色		砂粒・白色粒子	10M
第7図16	胴	貝殻条痕文	暗褐色		繊維・白色粒子	10M
第7図17	胴	貝殻条痕文	赤褐色		繊維・角閃石・砂粒	
第7図48	胴	貝殻条痕文	赤褐色		繊維・角閃石・砂粒	
第7図49	胴	貝殻条痕文	褐色		繊維・角閃石・砂粒	10M
第7図50	胴	貝殻条痕文	灰褐色		繊維・白色粒子・細礫・砂粒	65H
第7図51	口縁	半截竹管による横位波状文・最上段は直線文	暗赤褐色		角閃石・細礫・砂粒	
第7図52	口縁	沈線	明褐色		角閃石・砂粒	10M
第7図53	口縁	縄文RL・横位の地に半截竹管による横位平行波状文	褐色		砂粒	10M
第7図54	胴	縄文RL・縦位	明褐色	IV類	白色粒子・砂粒	10M

第3表 遺構外出土縄文土器一覽

押図番号	器種名	石材	刃部加工	整形加工	成形加工	素材技術	素材	遺存状態	長さ	幅	厚さ	重量
第7図55	スタンプ形石器	砂岩	なし	なし	HD	適用外	礫	完形	119.09	89.73	49.77	547.9
第7図56	礫器	ホルンフェルス	HD	なし	なし	適用外	礫	完形	84.70	74.15	35.65	248.7
第7図57	横刃	安山岩	HD	なし	なし	なし	扁平礫	両側刃欠	58.89	63.95	13.98	63.5
第7図58	石皿	片岩	適用外	適用外	適用外	適用外	礫	破片	30.27	40.65	13.61	17.9
第7図59	剥片	ホルンフェルス	適用外	適用外	適用外	HD	横長剥片	完形	25.49	43.89	6.43	5.7
第7図60	剥片	ホルンフェルス	適用外	適用外	適用外	HD	横長剥片	完形	31.87	49.77	16.02	22.1

HD:Hard hammer Direct flaking

(単位:mm,g)

第4表 遺構外出土石器一覧

F種 燃糸文・文様原体太（2mm以上）・施文粗（燃糸の間隔が原体の太さを超える）

30・31はRの燃糸文をもつ胴部片で、いずれも細礫の混入が顕著である。稲荷原式と思われる。

G種 燃糸文・文様原体太（2mm以上）・施文密（燃糸の間隔が原体の太さ以下）

32は丸みを帯びた尖底部である。Rの燃糸が施文される。

H種 無文のもの

33～37の口縁部はいずれもやや肥厚し、ほぼ直上する。37は細礫の混入が顕著である。稲荷台式と思われる。38の口縁部は灰褐色を呈し、肥厚せず直上する。稲荷原式。39・40は胴部片で、40の上端面は輪積み痕が擬似口縁となっている。

I類 早期後半条痕文系土器群（第6図41～45、第7図46～50、第3表）

41は口唇部上端に貝殻条痕による刻みをつけ、外面には横位に条痕文を施文している。42は縷杉状の凹線文を、内面には貝殻条痕文を施文する。野鳥式。43は平行した2本の沈線によって帯状（棒状）のモチーフを描きその沈線間には磨きが施される。また帯状のモチーフに挟まれた三角状のコーナー部や沈線には竹管によるものと思われる半月状の刺突文が施文される。縄ヶ島台式。44～50は貝殻条痕文を有する胴部片である。

II類 前期後半諸磯式土器（第7図51～53、第3表）

51は口縁部片で半載竹管によって横位の波状文が施されるが、最上段については直線文である。52は口縁部片で波状口縁に沿って弧状の曲線文が施される。53は口縁部片でRLの縄文地に半載竹管による横位の平行沈線が施文される。51・52は諸磯a式、53は諸磯b式。

III類 中期後半加曾利E式土器（第7図54、第3表）

54はRLの縄文が施文された胴部片である。加曾利E式と思われるが詳細は不明。

V類 石器類（第7図55～60、第4表）

55は砂岩製のスタンプ形石器である。両側辺に加工を施している。右側辺には敲打痕も見受けられる。底面には擦痕や敲打痕などの使用痕は認められない。

56はホルンフェルス製の礫器である。刃部は裏面側からのみの加工であり、片刃である。扁平礫を素材としている。

57は安山岩製の横刃である。両側辺に欠損している。扁平礫を素材として、片面側のみ調整を施している。

58は片岩製の石皿の破片である。表裏面ともに使用が認められる。特に表面は凹み状を呈しており、中央はかなり薄くなっている。

59・60はホルンフェルス製の横長剥片である。59は打製石斧の製作剥片と思われる。60は表面と打面に原礫面が残置している。打製石斧の製作剥片と思われる。

第2群 弥生時代の土器 (第7図61・62)

すべて10Mの覆土中からの出土である。

61・62は壺形土器の胴部破片である。61は外面が赤彩される。胎土の色調は暗黄褐色を呈し、茶褐色粒子・砂粒を含む。内面はヘラナデ、外面はハケ目調整が施される。

62の色調は暗黄褐色を呈し、胎土には橙色粒子・砂粒を含む。内外面ハケ目調整が施される。

第3群 中・近世の遺物 (図版4-1~4、第5表)

すべて10Mの覆土中からの出土である。

1・3は陶器、2は土器である。

4は泥面子である。恵比寿天。長さ4.3cm・幅3.0cm・重さ11.8g。

図版番号	遺物	種類	時代	産地	特記事項	出土位置
図版4-1	刷毛目鉢	陶器	19C	瀬戸美濃	口縁部、白濁輪	10M
図版4-2	ほうろく	土器	18C~19C		口縁部~底部下半、内外面黒色	10M
図版4-3	壺	陶器	18C~19C	常滑	底部	10M

第5表 遺構外出土陶器・土器一覧

第3章 西原大塚遺跡第65地点の調査

第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

西原大塚遺跡は、志木市幸町3丁目を中心に存在する遺跡で、東武東上線志木駅の1km程西方に位置している。本遺跡は、北東-南西方向に約700m、北西-南東方向に約150mほどの広がりを持ち、面積163,100㎡を有する市内最大規模の遺跡である。

遺跡を地勢的に見ると、武蔵野台地の北端部にあたり、標高は遺跡南端で約19m、北端で約14mを測り、大略南から北にかけて序々に標高が低くなっている。岸線部は西側でゆるやかな傾斜地になっているが、北側では際立った断崖地形に変化している様子が観察される。この遺跡の北西方向には柳瀬川が北東流し、さらに崖下にはいくつもの湧水地があったという記録もあることから、古より生活するためには欠かすことのできない飲料水が豊富にあったものと想像される。

遺跡の現況は、大部分が畑地であるが、平成5年度以降、この地域内で西原特定土地区画整理事業が本格的に開始されており、これに伴う発掘調査が急ピッチに遂行されている。平成10年以降は、道路の完成に付随して個人住宅・共同住宅建設などの小規模開発が急増しており、今後は事業の完了に前後して、さらに発掘調査が激増するものと予想される。これについても今後、いかに迅速に対応するかが課題であろう。

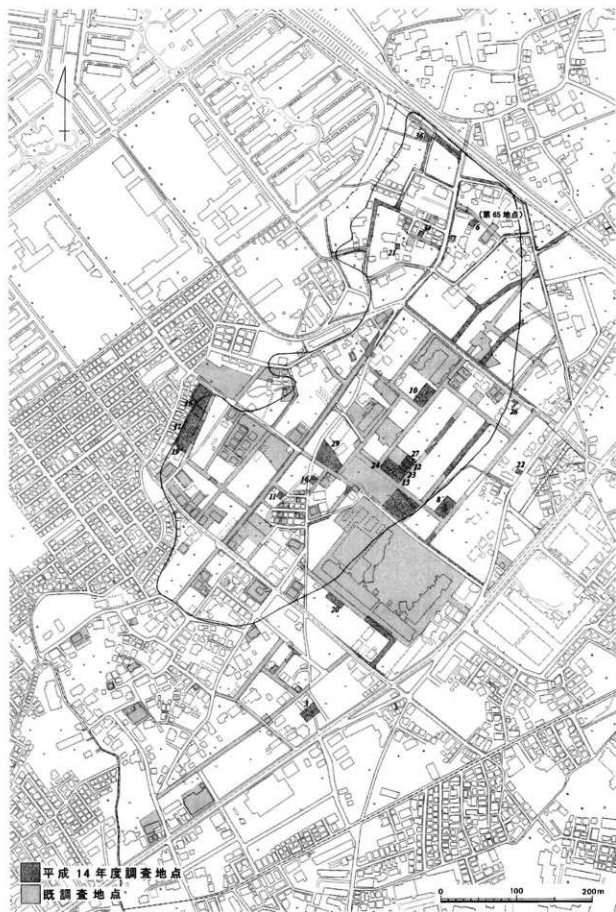
本遺跡は、昭和48年に第1回目の発掘調査が実施され、以後の調査から、旧石器時代、縄文時代前-晩期、弥生時代後期、古墳時代前・後期、奈良・平安時代、中・近世の複合遺跡であることが判明している。

(2) 発掘調査の経過

確認調査は、平成14年7月25日に実施した。調査区長軸は南北方向に2本のトレンチを設定し、バックホーを使用し表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、調査区西端から弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものと思われる住居跡1軒を確認した。そのため、ただちに依頼者に調査の結果を報告し、保存のための協議を行った。その結果、計画を変更することは不可能であるという回答を得たため、教育委員会は依頼者に発掘調査の実施を要請し、同日には依頼者から教育委員会に発掘調査の依頼があったため、教育委員会ではこれを受理し、発掘調査を実施することに決定した。

人員導入による発掘調査は、翌26日から開始した。重機による表土剥ぎ作業は、前日に終了していたため、まず器材の搬入作業を行い、その後、調査区域内の整備と細部の遺構確認作業を行った。その結果、調査区域内には、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての住居跡3軒が分布していることが明らかになった。同日午後からは、371号住居跡(371Y)の精査を開始し、372・373号住居跡(372・373Y)については、土層観察ベルトを設定するに終わった。

29日、371Yはほぼ床硬化面が露出した状態で検出されたため、付属施設を確認するために床面の精査を行う。372・373Yは攪乱が著しく、新旧関係が不明であったため、覆土中の遺物の取り上げについては、2軒通して遺物出土状態を平板測量により全点ドットを取ることにした。



第8図 周辺の地形と調査地点(1/5000)

平成16年3月31日現在

30日、372Yの覆土中に373Yの床面が確認されたことから、新旧関係が確定した。そのため、373Yの精査を先行して行うことに切り替える。373Yの床面上からは、完形の小型精製土器を中心とした土器が数点と土製品1点が出土した。373Yは古墳時代前期の住居跡であることが判明した。

31日、371Yは掘乱抜き及び遺構を完掘し、その後写真撮影・平板実測を終了した。372・373Yについては、セクションA-A'の実測終了後、ベルトをはずした。その後、373Yの精査を先行し、貯蔵穴を確認、掘りを終了する。その後、壁溝の掘りを行い、遺物出土状態の写真撮影を行った後、遺物出土状態の平板測量を行い、遺物の取り上げを開始する。

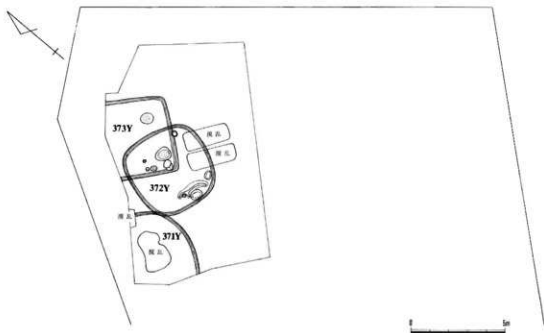
8月1日、371Yの掘り方精査を完了する。373Yは午前中にすべての遺物出土状態の測量と遺物取り上げを終了する。午後からは遺構の平板測量及びエレベーション実測を終了、その後掘り方の精査を開始し、終了する。372Yは精査を再開する。

2日、372Yの精査を行う。住居南東隅から祭壇状遺構と思われる砂利層が確認できた。372Yの時期については、373Yに切られることと出土遺物から、弥生時代後期末葉の所産のものと考えられる。

5日、遺物出土状態の写真撮影後、平板測量を開始する。祭壇状遺構の砂利層については、サンプリングを行った。

6日、遺物出土状態の平板測量と遺物取り上げを終了する。その後、遺構平板を開始し終了、午後から遺構の写真撮影を終了する。その後、掘り方の精査を終了し、すべての精査を完了する。同日には、器材搬出作業を行った。

埋め戻し作業は、9日に開始し、同日終了した。



第9図 遺構分布図(1/200)

第2節 検出された遺構と遺物

(1) 住居跡

371号住居跡 (第10図)

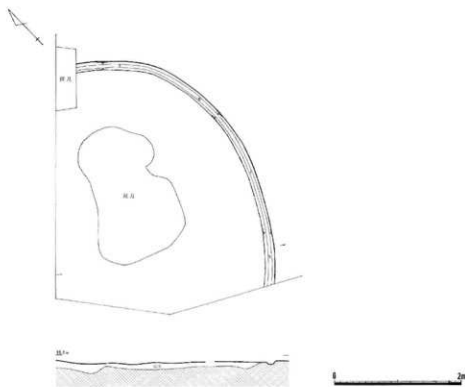
[住居構造] 住居の東側以外は調査区域外であることと、さらに攪乱により壊されているため詳細は不明である。(平面形) 楕円形か。(規模) 不明。(壁高) 4～6cmを測り、壁は急斜に立ち上がる。(壁溝) 確認できた範囲では巡らされていた。上幅12～16cm・下幅4～6cm・深さ5～8cmを測る。(床面) 全体に軟弱だったが、攪乱の南側に硬化した床面が若干認められた。貼床が7～15cmの厚さで施されていた。(柱穴) 確認できなかった。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む黒褐色土を基調とする。壁際はローム粒子・ローム小ブロックを多く含む明茶褐色土、貼床はローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 亮の小破片が数点出土しただけで図示できるものはなかった。

[時期] 弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭。

372号住居跡 (第11・12図)

[住居構造] 373Yに切られる。東壁の上部2ヶ所が攪乱により30cm程壊されていた。(平面形) 隅丸方形。(規模) 4.48×4.36m。(壁高) 35～43cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 全周する。上幅12～16cm・下幅4～8cm・深さ6～11cmを測る。(床面) 全体的に良く硬化している。貼床が



第10図 371号住居跡(1/60)

6～20cmの厚さで施されていた。(炉) 2ヶ所確認された。住居中央より北壁に偏って位置するものを炉A、中央寄りのものを炉Bとする。炉Aは、楕円形で規模は80×70cm・深さ8cm程の掘り込みを持つ地床炉である。炉Bは、北側を攪乱により壊されているため詳細は不明であるが、規模は不明×40cm・深さ6cmの掘り込みを持つ地床炉である。(柱穴) 主柱穴は検出されなかったが、入口の梯子穴と思われる深さ19cmの小ビットが南壁の中央から50cmほど内側で確認された。このビットの北側に高さ3cmの凸堤が巡らされている。(貯蔵穴) 南壁の中央より東側に偏って位置し、隅丸方形を呈する。規模は64×54cm・深さ28cmを測る。北側には高さ3～6cmの凸堤が入口ビットから続いて巡らされている。(覆土) 20層に分層される。南東コーナーより祭壇状遺構と思われる赤色砂利層が検出された。その砂利層の下から、規模45×36cm・深さ20cmの掘り込みを確認した。

[遺物] 壺・甕などが出土した。

[時期] 弥生時代後期末葉。

372号住居跡出土遺物 (第13図)

壺形土器 (1～6・10～14)

1は現器高9.4cm・胴部最大径10.9cm。胴部中位に最大径をもち、胴部上半から頸部にかけては明瞭に屈曲せず弓状を呈する。口頸部内面と胴部外面は無文部は赤彩される。胎土には黄褐色粒子を多く含む。内面は頸部に横方向のヘラ磨き調整、以下ヘラナデが施され、外面は頸部に縦方向のハケ目調整、以下横方向のヘラ磨き調整が施される。貯蔵穴付近の覆土中(床上約20cm)からの出土で、頸部から胴部下半にかけて4/5程遺存する。

2は現器高14.2cm・口径9.6cm。胴部上半から頸部にかけてはやや屈曲し、口縁部は受口状に外傾する。文様は口頸部に4段の網目状捺糸文が施文される。口頸部内面と胴部外面は無文部は赤彩される。胎土には橙色粒子・砂粒を僅かに含む。内面は口頸部が横方向のヘラ磨き調整、以下ヘラナデが施されるが、胴部上半には指頭押捺による成形痕が観察される。外面は胴部上半が縦方向に、下半が斜方向にヘラ磨き調整が施される。貯蔵穴付近のほぼ床面上からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて2/3程遺存する。

3は現器高7.6cm・口径20.0cm。頸部から口縁部にかけてはやや受口状に外反し、口縁部は幅広の複合口縁を呈する。文様は複合部にLRの単節斜縄文を横位に2段施文し、その後4本一単位の棒状貼付文が4単位付されている。さらに、直径1cm前後の円形赤彩文が3cm程の間隔で全周する。口縁文様部を除き全面が赤彩される。胎土には黄褐色粒子を多く含む。内面は横方向のヘラ磨き調整、頸部外面はハケ目調整後縦方向のヘラ磨き調整が施される。西壁近くのほぼ床面上からの出土で、口縁部から頸部にかけて4/5程遺存する。

4は現器高5.8cm・推定底径9.4cm。底部は平底を呈する。外面赤彩である。胎土には黄褐色粒子を多く含む。内面は横位のヘラナデ、外面は縦位ハケ目調整後横位のヘラ磨き調整が施される。南東コーナーのほぼ床面上からの出土で、底部から胴部下半にかけて1/5程遺存する。

5は広口壺である。現器高19.3cm・頸部推定径16cm。6の土器に器形・胎土が類似する。全体に淡黄褐色を呈し、器面は摩耗が著しいが、内外面の所々に赤色塗料の付着が観察されるため、内外面赤彩されるものと思われる。胎土には黄褐色粒子を多く、砂粒を含む。内面はハケ目調整後ヘラナデ、外面はハケ目調整後胴部上半には縦方向の粗いヘラ磨き調整が、下半には横方向のヘラ磨き調整が施される。住居南西コーナーの覆土中を中心にやや散在的に出土し、頸部から底部にかけて1/3程遺存する。

6は広口壺である。器高20.8cm・推定口径20.3cm・底径9.6cm。底部下半に稜を有し、口縁部は外反する。5の土器同様に全体が淡黄褐色を呈し、器面は磨耗が著しいが、内外面の所々に赤色塗料の付着が観察されることから、内外面赤彩されるものと思われる。胎土には黄褐色粒子を多く、砂粒を含む。底部に木葉痕が残る。内面はハケ目調整後ヘラナデが施され、外面はハケ目調整後口縁部から胴部中位にかけてがヘラナデ、胴部下半以下は横方向のヘラ磨き調整が施される。住居南西コーナーの覆土中を中心にやや散在的に出土し、遺存度は1/3程である。

10～12は口縁部小破片である。10はやや受け口状を呈する単純口縁の土器である。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内外面ハケ目調整後、ヘラ磨き調整が施される。南壁近くのほぼ床面上からの出土である。11は幅広の複合口縁を呈する赤彩土器である。胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内外面ヘラ磨き調整が施されるが、外面複合部直下の頸部にはハケ目痕が残る。貯蔵凸堤すぐ北側の床面上からの出土である。12は11同様に幅広の複合口縁を呈する赤彩土器であるが、外面の複合部下端にはハケ状工具による刻みがまわる。胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内外面ヘラ磨き調整が施される。覆土中からの出土である。

13・14は文様帯をもつ胴部小破片である。13は単節斜縄文による羽状縄文が施文される。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には白色粒子・茶褐色粒子を含む。西壁近くの覆土中（床上約8cm）からの出土である。14は羽状縄文の下端に「S」字状結節文がまわる。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子を含む。貯蔵穴の位置であるが、床面上から30cm程浮いた覆土中からの出土である。

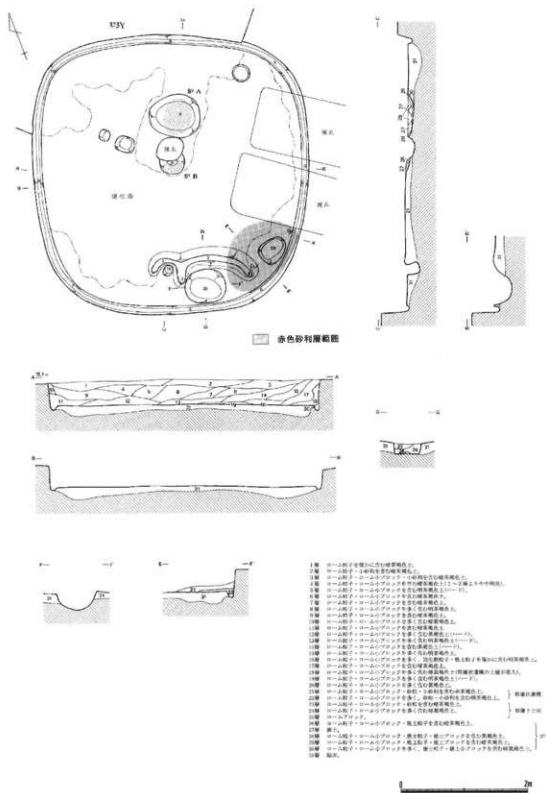
甕形土器（7～9・15～19）

7は小型台付甕である。器高13.7cm・推定口径10.2cm・底径6.8cm。胴部上半に最大径をもち、頸部はやや「く」字状を呈し、口縁部は外傾する。口唇端部にはハケ状工具による刻みがまわる。脚台部は「ハ」字状を呈する。器面全体は煤けて黒褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内面はヘラナデ後、粗くヘラ磨き調整が施されるが、脚台部は底部近くにハケ目調整が施される。外面は全面縦方向のハケ目調整である。住居中心からやや南寄りの覆土中（床上約30cm）からの出土で、遺存度は2/3程である。

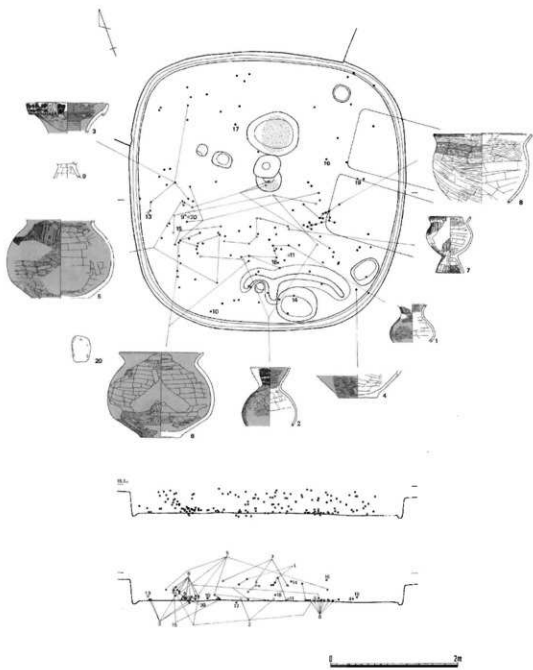
8は台付甕であろう。現器高17.0cm・推定口径23.7cm。最大径は口縁部と胴部中位にもち、頸部は緩くくびれ、口縁部は外傾する。口唇端部には刻みがまわる。器面全体は黒く煤けて黒褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。全面にやや目の粗い横方向ないし斜方向のハケ目調整を施した後、内面にはヘラナデを施している。住居中心からやや南寄りの床面上からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて1/2程遺存する。

9は小型台付甕の脚台部である。現器高4.0cm。「ハ」字状を呈する。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内外面ヘラナデが施される。西壁寄りのほぼ床面上からの出土で、脚台部のみ1/3程遺存する。

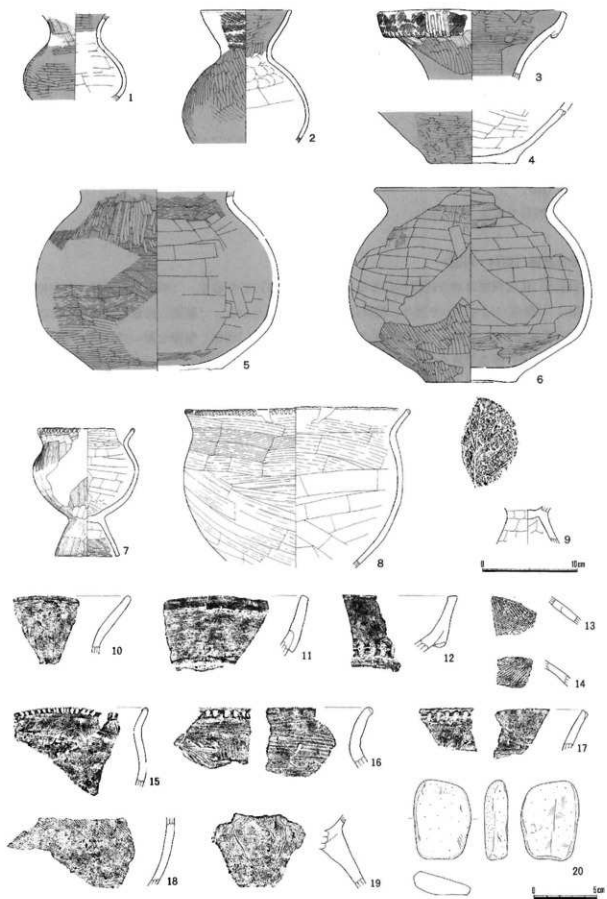
15～17は口縁部小破片である。15は口唇端部に刻みがまわる。全体に暗黄褐色を呈するが、外面は黒く煤けている。胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内面は粗いハケ目調整後、ヘラナデが施され、外面はハケ目調整が施される。住居南西コーナー近くからの出土である。16は頸部がやや「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。口唇部外面に刻みがまわる。外面は煤けて黒褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒・小石を含む。内外面粗いハケ目調整が施されるが、口縁部外面にはその後、軽い横ナデが施される。住居中心からやや東寄りの覆土中（床上約30cm）からの出土である。17は内外面に目の細かい



第11図 372号住居跡(1/60)



第12图 372号住居跡遺物出土状態(1/60·1/9)



第13图 372号住居跡出土遺物(1/4・1/3)

ハケ目調整が施される土器で、口唇部外面にはハケ状工具による刻みがまわる。色調は黒褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子を含む。炉Aすぐ西側の床面上からの出土である。

18は胴部破片である。外面は黒く焼け黒色を呈し、内面は黄褐色を呈する。胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内面はヘラナデ、外面はハケ目調整が施される。貯蔵穴凸堤すぐ北側の覆土中（床上約10cm）からの出土である。

19は台付甕の脚台部破片である。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内面はヘラナデ、外面はハケ目調整が施される。

石製品 (20)

砂岩製の磨石である（第7表）。

373号住居跡（第14・15図）

〔住居構造〕住居西側は調査区域外にあると思われる。372Yを切る。（平面形）方形。（規模）不明×4.23m。（壁高）13～24cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）確認できた範囲では、全周する。上幅12～22cm・下幅5～6cm・深さ6～11cmを測る。（床面）壁際を除いて、良く硬化している。貼床が2～20cmの厚さで施されており、372Yと重複していない部分の壁際が厚くなっていた。（炉）東コーナーに寄って位置する。攪乱により壊されていたが、炉床は良く焼けて赤化しており、白色粘土と礫1点を検出した。70×54cmの楕円形を呈する。（柱穴）主柱穴は確認できなかったが、入口梯子穴と思われる深さ14cmの小ピットが、南西壁から60cm程離れたところより検出された。（貯蔵穴）南コーナーから1m程離れた南西壁に位置し、隅丸長方形を呈する。規模は38×30cm・深さ27cmを測る。覆土はローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土を基調とする。（覆土）5層に分層される。

〔遺物〕小型埴・小型台付埴、土製品（土玉）1点などが出土した。

〔時期〕古墳時代前期。

373号住居跡出土遺物（第16図）

小型埴形土器（1～3）

1は器高6.5cm・口径10.0cm・底径2.8cm。体部上半に膨らみをもち、口縁部は直線的に外傾する。底部は基筒底状を呈する。色調は赤褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。全面赤彩される。器面全面に目の粗いハケ目調整を施し、その後口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデされるが、底部のみ僅かにヘラ磨き調整が施される。外面はヘラ磨き調整はされず、再度ハケ目調整を施している。南東壁近くの床面上からの出土で、遺存度は4/5強である。

2は器高7.0cm・口径10.0cm・底径3.5cm。偏平した丸味をもつ体部をもち、口縁部は大きく直線的に外傾する。底部は基筒底状を呈する。全面赤彩である。胎土には黄褐色粒子・砂粒・小石を含む。内面体部以下を除き全面にヘラ磨き調整が施されるが、外面頸部付近にハケ目痕が残る。内面体部はヘラナデである。南東壁際の床面上からの出土で、完形品である。

3は現器高7.7cm。算盤玉状の体部をもつ精巧な作りの土器である。外面及び内面頸部は赤彩される。胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。外面及び内面頸部はいいいにヘラ磨き調整が施されるが、内面頸部以下はヘラナデ後体部中位以下を中心にヘラ磨き調整が施される。外面体部には部分的にハケ目痕が残る。南西壁から住居中心の床面上から散在して出土し、頸部から体部下半にかけて1/2程遺存する。

小型台付埴形土器（4・5・7）

4は器高12.5cm・口径10.9cm・底径12.1cm。全面赤彩の精巧な作りの土器である。扁平な体部をもち、口縁部はやや内湾気味に外傾している。脚台部は裾部に向かって大きく開き、途中3孔が穿たれている。胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。脚部内面を除きヘラ磨き調整が丁寧に施されるが、ハケ目痕は若干観察できる。内面体部は剥落が著しいため、図示できなかつた。脚部内面はヘラナデされるが、裾部にはハケ目痕が残る。住居南コーナーの床面上からの出土で、遺存度は4/5強である。

5は現器高7.9cm・底径10.8cm。器台の可能性もある。全面赤彩の精巧な作りの土器である。4の土器同様に脚台部は裾部に向かって大きく開き、途中3孔が穿たれている。胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内外面ヘラ磨き調整が丁寧に施されるが、所々にうっすらとハケ目痕が観察できる。内面にはヘラ杖工具による成形痕が残る。南西壁際の床面上からの出土で、脚台部のみ4/5強遺存する。

7は脚台部の小破片である。全面赤彩の精巧な作りの土器で、1ヶ所穿孔が残る。胎土には砂粒を含む。内外面ヘラ磨き調整が施される。貯蔵穴近くの床面上からの出土である。

壺形土器(8)

胴部小破片である。文様は縄文原体の端末を結束し、結節文を伴う2段の無節斜縄文を羽状に施している(端末結節縄文)。その後円形赤彩文が付されている。外面無文部は赤彩される。胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。内面はヘラナデ、外面無文部はヘラ磨き調整が施される。貯蔵穴近くの覆土中(床上約25cm)からの出土である。

甕形土器(6・9・10)

6は台付甕の脚台部である。現器高3.6cm・推定底径8.4cm。「ハ」字状を呈する。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。内外面ハケ目調整が施されるが、外面にはその後部分的にヘラ磨き調整が施される。住居東コーナー近くの床面上からの出土で、脚台部を1/5弱遺存する。

9・10はハケ甕の胴部小破片である。9は外面が黒色を呈し、内面は暗茶褐色を呈する。胎土には黄褐色粒子を多く含む。内面はヘラナデ、外面はハケ目調整が施される。入口梯子穴近くの覆土中(床上約20cm)からの出土である。10は外面が黒褐色、内面が暗橙色を呈する。胎土には砂粒を多く含む。内面はヘラナデ、外面はハケ目調整が施される。住居南コーナーの覆土中(床上約10cm)からの出土である。

土製品(11)

土玉であるが、直径約3cmと大きめであるため、足玉(たるたま)として使用された可能性がある。長さ3.0cm・幅2.9cm・穿孔径0.5cm・重さ25.2g。意図的かどうか不明であるが、全面焼されて黒色を呈する。表面には指頭により成形された押捺痕が観察できる。住居南コーナーの床面上からの出土で、完形品である。

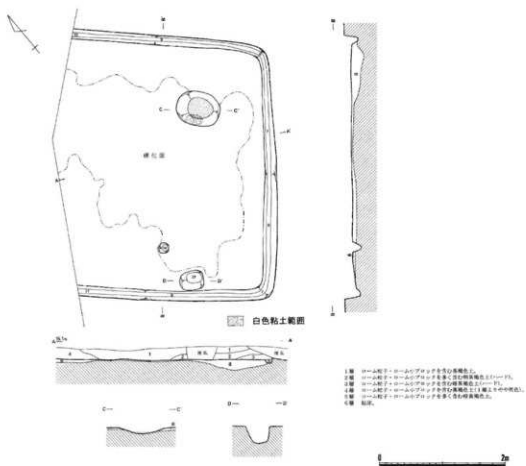
(2) 遺構外出土遺物

遺構外からは、縄文時代の土器・石器、弥生時代の土器、古墳時代の須恵器、近世の陶磁器・土器が出土した。以下、第1群～第5群に分類し説明する。

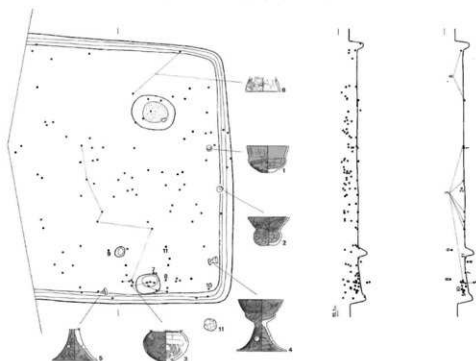
第1群 縄文時代の土器(第17図1～24、第6表)

1は縄文時代前期中葉の黒浜式と思われる。胎土に繊維を含み、ごく表面のみ褐色を呈し、内部は暗灰色である。文様はRの縄文が横位に施される。

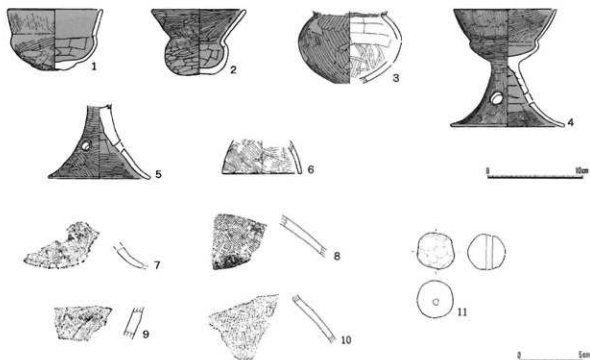
2は口縁直下に半截竹管の内面でごく浅く押し引き施文され、平行した破線状を呈する。前期後葉の所産と思われる。



第14図 373号住居跡(1/60)



第15図 373号住居跡遺物出土状態(1/60・1/9)



第16図 373号住居跡出土遺物(1/4・1/3)

3・4は中期中葉の勝坂式の胴部片で、両者とも隆帯と連続した爪形文によって文様が構成される。また両者とも胎土に砂粒の混入が顕著である。

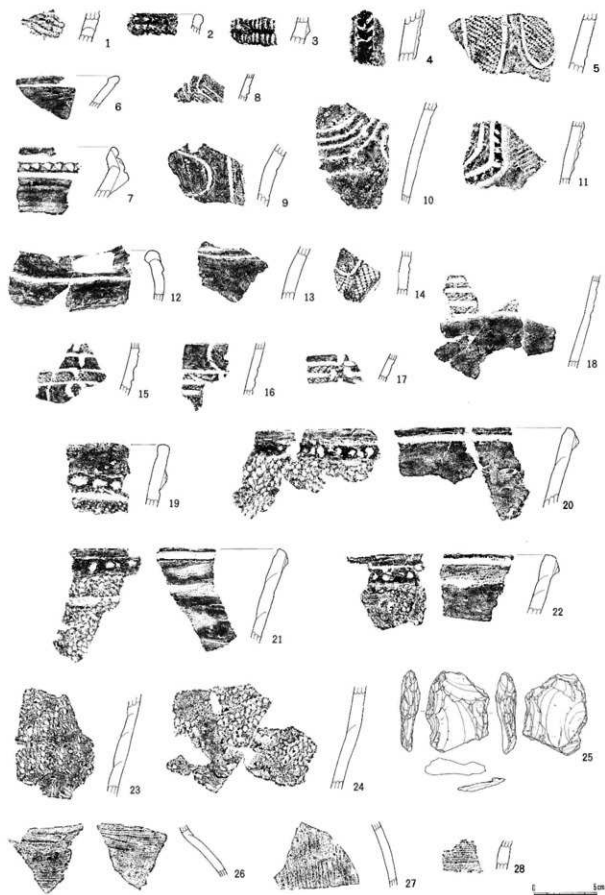
5は中期後葉の加曾利EⅣ式の胴部片である。「U」状の沈線区画内にL R縄文を充填した文様を有する。

6～11は後期前葉の堀之内式の土器片群である。6は口縁直下に沈線を有し内面が肥厚した口縁片。7は口縁片で上部が「く」状に内向し、外面上部に三角状刺突を充填した平行沈線による文様帯を有する。8～10は沈線による文様描出される土器片。11はLの縄文地に隆帯及び沈線で文様が描出される。

12～24は後期中葉の加曾利B式と思われる土器片群である。12は口縁部片で、口縁に平行した沈線文が施される。13は文様帯と無文部の境界部と思われる。14は沈線による区画内に縄文を充填した帯縄文を有する胴部片。15～18は平行沈線と磨消縄文による横帯縄文を有する土器片で、15はR Lの縄、16～18は同一個体と思われL Rの縄が用いられる。19～24は粗製土器片である。19は口縁直下に幅の狭い無文帯を有しその下に指頭圧痕を有する紐線文を貼付する。20～24は同一個体と思われる。L R縄文地を持ち口縁直下に指頭圧痕を有する紐線文を貼付している。粗製土器はいずれも土器内面の口縁直下に1条の沈線を巡らせている。

第2群 縄文時代の石器 (第17図25、第7表)

粘板岩製の削器である。横長剥片を素材としており、下部を欠損している。両側辺の表裏面側に調整を施している。打製石斧の製作途中に表面の大きな剥離により厚みが薄くなってしまい、転用したと推測される。



第17圖 遺構外出土遺物(1/3)

標図番号	部位	文様・特徴など	色調	分類	胎土	備考・出土遺構
第17図1	胴	R縄文・横位	褐色	黒沢	織維	372Y
第17図2	口縁	手戴竹管による平行した破線状の刺突文	褐色	酒碗cか?		372Y
第17図3	胴	隆帯脇に連続爪形文	明褐色	藤坂	砂粒	373Y
第17図4	胴	隆帯側面に連続爪形文	褐色	藤坂	砂粒	
第17図5	胴	LR縄文・縦位充填、「U」状文	褐色	加曾利EⅣ	砂粒・白色粒子	372Y
第17図6	口縁	沈線	灰褐色	堀之内1	砂粒・白色粒子	372Y
第17図7	口縁	平行沈線間に三角刺突を充填	褐色	堀之内2	砂粒	
第17図8	胴	平行沈線	褐色	堀之内1		372Y
第17図9	胴	沈線	明褐色	堀之内1	砂粒・白色粒子	372Y
第17図10	胴	同心円状沈線	明褐色	堀之内1	砂粒	372Y
第17図11	胴	L縄文・横位、沈線による区画文、隆帯上に刻み	明褐色	堀之内1	砂粒	
第17図12	口縁	口縁部直下に沈線	暗褐色	加曾利B	砂粒・角四石	372Y
第17図13	胴	横位の沈線	褐色	加曾利B	砂粒	
第17図14	胴	沈線区画内にLR縄文を充填した帯縄文	褐色	加曾利B	砂粒・白色粒子	373Y
第17図15	胴	RL磨消縄文による横位帯縄文	暗赤褐色	加曾利B1	砂粒・白色粒子・角四石	372Y
第17図16	胴		暗褐色			372Y
第17図17	胴	LR磨消縄文による横位帯縄文	褐色	加曾利B1	砂粒	372Y
第17図18	胴		褐色			372Y
第17図19	口縁	LR縄文、縦線文、縦線下沈線、口縁直下内面に横位沈線	褐色	加曾利B根製	砂粒・白色粒子	372Y
第17図20	口縁		褐色			372Y
第17図21	口縁		褐色			372Y
第17図22	口縁	LR縄文、縦線文、口縁直下内面に横位沈線	黒褐色	加曾利B根製	砂粒	372Y
第17図23	胴		黒褐色			372Y
第17図24	胴		暗褐色			372Y

第6表 遺構外出土縄文土器一覧

標図番号	器種名	石材	刃部加工	整形加工	成形加工	素材技術	素材	遺存状態	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第13図20	磨石	砂岩	適用外	適用外	適用外	適用外	福平礫	完形	64.42	46.62	15.91	74.4	372Y出土
第17図25	磨器	粘板岩	HD	なし	なし	不明	横長割片	下部欠	65.49	50.55	15.96	48.5	

(単位: cm, g)

第7表 372号住居跡・遺構外出土石器一覧

図版番号	遺物	種類	時代	産地	特記事項	出土位置
図版10-1	かわらけ	土器	16C	在地系	口縁部、ろくろ成形	遺構外
図版10-2	かわらけ	土器	近世?	在地系	口縁部、ろくろ成形	遺構外
図版10-3	灰輪鉢	陶器	近世?	瀬戸美濃	口縁部、内外面灰輪	373Y
図版10-4	志野皿	陶器	16C後～17C	瀬戸美濃	口縁部～底部	遺構外
図版10-5	壺?	陶器	17C末～18C前	瀬戸美濃	底部、ろくろ成形、底部赤切り痕、内外面鉄輪	372Y
図版10-6	土瓶	陶器	19C	信楽系	体部	371Y
図版10-7	飯	磁器	18C中	肥前系	頸部、染付、被熱	遺構外
図版10-8	黒壺	土器	18C後～19C	在地系	体部、内外面黒褐色	遺構外
図版10-9	ほうろく	土器	17C代	在地系	口縁部～体部下半、内外面黒色	遺構外
図版10-10	ほうろく	土器	近世	在地系	底部	373Y

第8表 遺構外出土陶磁器・土器一覧

第3群 弥生時代の土器（第17図26）

輪積み甕の頸部から胴部上半にかけての小破片である。外面は煤け黒色を呈し、内面は暗茶褐色を呈する。胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内外面目の細かいハケ目調整が施される。後期末葉に比定される。

第4群 古墳時代の須恵器（第17図27・28）

27は須恵器寛形土器の胴部小破片である。色調は灰褐色を呈し、胎土は精練されており、白色砂粒を僅かに含む程度である。内面は全体にナデられ、外面には平行叩き目痕が残る。6・7世紀か。

28は須恵器短頸壺の頸部小破片と思われる。色調は灰褐色を呈し、胎土には白色砂粒を含む。内面はナデ、外面はカキ目調整が施される。6・7世紀か。

第5群 中・近世の陶磁器・土器（図版10-1～10、第8表）

1・2・8～10は土器、3～6は陶器、7は磁器である。

第4章 まとめ

本書は、平成14年度に国庫補助事業として、確認調査及び発掘調査等を実施した計36地点の調査成果を収録したものである。そのうち発掘調査を実施したのは、田子山遺跡第81地点と西原大塚遺跡第65地点の2地点であった。

以下、これら2地点の調査所見をまとめることにする。

1. 田子山遺跡第81地点

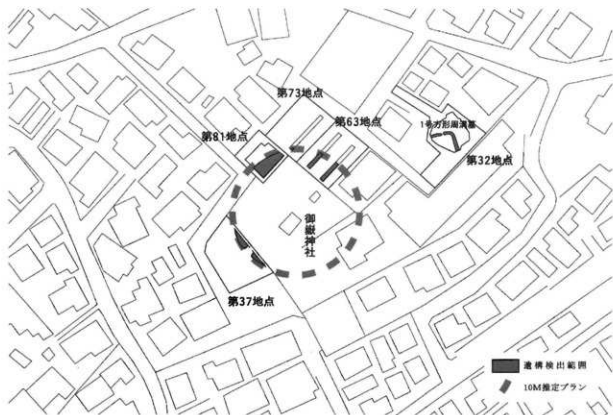
(1) 10号溝跡について

10号溝跡(10M)については、実は今回の調査当初からその検出が予想されたものであった。それは、過去に発掘調査をした第37地点の196・197号土坑(尾形・深井 1996)、そして第63地点・第73地点の確認調査で検出された遺構から考え合わせ、どうやら本調査の東側に隣接する御嶽神社を取り囲むように巨大な堀跡があるのではないかと想定されていたからである。つまり、今回の発掘調査により、その想定が実証されたことになった。

ここで、この遺構の基本構造を過去の調査例を含めて概観してみることにする。

第18図は、周辺図に10Mと考えられる遺構を過去の調査を基に合成し作成したものである。この図から考えると、10Mは周溝の外周が約33mの規模をもつ巨大な堀跡であり、やはり御嶽神社を取り囲むように存在することがわかる。遺物としては、縄文土器が多かったが、次に平安時代の土師器・須恵器の小破片が出土した。また、図示できなかったが、古墳時代後期の土師器の小破片も数点出土している。

以上、10Mの時期については、時期を正確に比定する良好な資料がないことから、今後の調査成果の



第18図 10号溝跡想定図(1/1000)

累積を待って検討したいと考えている。しかし現時点では、本地点のすぐ北東に第32地点（尾形・深井 1996）があり、そこから本道跡では方形周溝墓1基（第18図に記入）が検出されていることから、この一帯が弥生時代後期から続く墓域であった可能性があるものと想定したい。そう考えるならば、今回の10Mは30mを越えるというその規模から周溝墓を越えた古墳ということになるであろう。さらに推測すると、10Mの北側の走向角度が幾分東側にカーブし門形を描いていることから、円墳の形態になるものと考えられる。第37地点で検出された196・197号土坑については、2基の土坑として取り扱われているが、これを古墳の周溝が切れているブリッジとして捉えることも可能である。

御嶽神社の創建時期については、『志木市の社寺』（志木市教育委員会 1985）では、「天保2（1831）年の創立と伝えられるが、詳細は不明」と述べられている。こうした社寺の創建については、伝承的に時期が与えられていることが多いため、確たる根拠にはならないが、御嶽神社が創建する前に10Mが存在し機能していたことは間違いないようである。

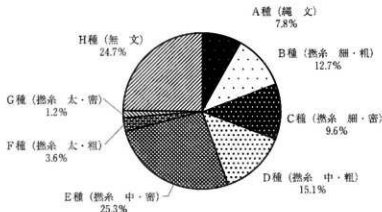
今後は、10Mの中心地に御嶽神社が現存することが偶然であるのか、あるいは御嶽神社は、この10Mが古墳であるならば、その墳丘であったであろう場所に意識して創建されたのかどうかなど様々な角度から解明するのも興味が尽きないところである。

（2）遺構外出土の縄文土器について

遺構外出土の縄文土器は、早期前半の燃糸文系土器、早期後半の条痕文系土器、前期後半の諸磯式土器、中期後半の加曾利E式土器が出土した。中心となって出土したのは早期の土器であったが、中でも燃糸文系の土器片が比較的まとまって出土した。そこでここでは燃糸文系土器について、簡単に触れることにする。

今回出土した燃糸文系土器片は総数184点であった。これらの土器は、地文等の特徴から細分しそれぞれ点数と燃糸文系の中での比を示すと以下のようになり（胎土から燃糸文系と思われるが表面剥離等で不明の土器片は比から除く）、縄文施文や原体の太い燃糸文は少数で、原体中の燃糸文や無文が目立った。

分類	点数
A種（縄文）	13
B種（燃糸 細・粗）	21
C種（燃糸 細・密）	16
D種（燃糸 中・粗）	25
E種（燃糸 中・密）	42
F種（燃糸 太・粗）	6
G種（燃糸 太・密）	2
H種（無文）	41
X種（不明）	18
合計	184



第19図 早期燃糸文系土器の割合

- A種 縄文施文されるもの。
13点 7.8%
- B種 燃糸文・文様原体細（1mm未満）・施文粗（燃糸の間隔が原体の太さを超える）
21点 12.7% 内、細礫を含む土器片数4点
- C種 燃糸文・文様原体細（1mm未満）・施文密（燃糸の間隔が原体の太さ以下）
16点 9.6% 内、細礫を含む土器片数2点
- D種 燃糸文・文様原体中（1mm～2mm未満）・施文粗（燃糸の間隔が原体の太さの2倍を超える）
25点 15.1%
- E種 燃糸文・文様原体中（1mm～2mm未満）・施文密（燃糸の間隔が原体の太さの2倍以下）
42点 25.3% 内、細礫を含む土器片数2点
- F種 燃糸文・文様原体太（2mm以上）・施文粗（燃糸の間隔が原体の太さを超える）
6点 3.6% 内、細礫を含む土器片数2点
- G種 燃糸文・文様原体太（2mm以上）・施文密（燃糸の間隔が原体の太さ以下）
2点 1.2%
- H種 無文
41点 24.7% 内、細礫を含む土器片数4点
- X種 不明
18点

これらの土器のうち土器型式を判断する材料となり得る口縁部片については全数図示した（第6図）が、口縁部の肥厚の特徴・文様から、1・4・38を除いて稲荷台式と判断された。これらの口縁破片と同様である燃糸文の原体細～中の破片については稲荷台式が主であると推測される。また、燃糸原体の太いものや、38のように灰褐色を呈し無文で厚手の破片については稲荷原式の可能性が高いと思われ、当調査地点は稲荷台式と稲荷原式が中心と考えられる。しかしこの二型式の関係については遺構に伴わず、層位的にも捉えることができないために詳細は不明である。

興味深いのは胎土中に混和材として細礫を含む土器で、9など一部には流水による円磨作用の見られない細礫を含有するものが存在する。これは細礫が人為的に破碎された可能性を示唆するものである。同様の類例は、東京都板橋区前野田向遺跡（藤波・林・宮尾他 1996）に見られ、さらに胎土分析により製作地の違いについても指摘している。今回の調査では胎土分析は行っていないが、今後の調査においては土器製作技術のみならず、土器及び集団同士の移動・交流の面からも注目すべきであろう。

2. 西原大塚遺跡第65地点

(1) 検出された遺構について

本地点からは、弥生時代後期末葉～古墳時代前期にかけての住居跡3軒（371～373Y）が検出された。これら3軒のうち、373Yが372Yを切って構築していることは確認できたが、371Yと372Yは一部重複しているが、明確に新旧関係を確認することはできなかった。

ここでは、住居の細部構造について簡単にまとめてみることにする。

まず、平面形は、371・373Yが調査区域外で確認できない部分もあるが、3軒共に平面形が異なる印象である。371Yは円形ないし楕円形、372Yは隅丸方形、373Yは方形である。短絡的ではあるが、こ

れら3軒は、371Yと373Yの同時存在は考えられなくはないが、この住居跡の形態差のみから判断すると、新旧関係は古い順に371Y→372Y→373Yの可能性がある。

炉については、371Yでは確認できなかったが、372・373Yは地床炉であった。372Yについては、炉A・Bの2ヶ所で検出され、そのうち炉Aは規模80×70cmの楕円形を呈し、炉Bに比べて大きいため、煮炊き施設の主体となるものと考えられる。373Yについては、東コーナーから1m程離れた位置で検出されている。地床炉として判断したが、焼土中から白色粘土と礫1点が確認でき（図版7-7）、どう理解するか判断に苦しむところである。また、検出位置が主軸上になく、東コーナーに寄っていることも特徴と言える。

貯蔵穴については、372Yのみで検出された。南壁の中央よりやや南コーナーに寄った位置に設置され、凸堤が付随するタイプであった。凸堤は下幅35cm・上幅8cm前後・高さ3～6cmの隆起帯である。

入口梯子穴と考えられる小ピットは、372Yと373Yで検出されている。372Yのものは貯蔵穴に付随する凸堤によって半分程埋まれており、掘り込みの向きは若干住居内側に傾いている。斜向ピットと言えるであろう。深さは372Yが19cm、373Yが14cmである。

また、祭壇状遺構（小倉 1991）と考えられている赤色砂利層が、372Yの住居南東コーナーから確認されている。その砂利層は132×90cmの範囲に広がり、約10cmの厚さをもっているが、壁際より住居内側の方がその堆積が薄く、貯蔵穴の凸堤や壁溝を覆っていた。これは、この砂利層が今回に限って確認されていることではなく、すでに多くの住居跡の貯蔵穴右側の住居コーナーという定位位置から確認されていることを併せて考えると、その砂利層は住居の覆土として堆積したのではなく、台状の盛り上がりがある構造物であることは間違いないであろう。なお、今回はその祭壇状遺構の下部から、45×36cm・深さ20cmの掘り込みが検出されている。本市では初めての例であるが、この掘り込み内には祭壇状遺構の砂利層が堆積せず、ローム粒子・ロームブロックの充填された土層が堆積していた。おそらく、この掘り込みは何らかの理由で人為的に埋め戻され、祭壇状遺構はその後設置されたものと考えられる。

以上、3軒の住居跡について簡単に説明したが、最後に372Yと373Yの決定的な住居構造の違いについて、次のようにまとめることにする。

	372Y	373Y
平面形	隅丸方形	方形
柱穴	なし	なし
入口梯子穴	南壁近く	なし
貯蔵穴	南壁中央よりやや東	なし
炉跡	炉A・炉Bの2ヶ所	住居東コーナーに1ヶ所
祭壇状遺構	貯蔵穴右側の住居南東コーナー	なし

このように372Yと373Yを比較すると、373Yのように平面形が方形に定型化した住居では、すべての施設で基本的な構造が省略されたり偏在するものと判断できる。これについては、平成15年度に発掘調査を実施した新邸遺跡第8地点で同様の例が見られ、8軒の住居跡について炉や柱穴・貯蔵穴・祭壇状遺構などが設置されていなかった（註1）。つまり、住居跡の時期が372Yは弥生時代後期末葉に比定され、373Yや新邸遺跡の8軒の住居跡が古墳時代前期に比定されるというように時代差での変化であることは明確である。しかし、その住居構造に変化を与えた要因については、今後追究しなければならぬ重要な課題と言える。

(2) 372・373号住居跡出土の土器について

ここでは、弥生時代後期末葉の372Yと古墳時代前期の373Yから出土した土器について考えることにする。

372Y出土土器 (第13図)

壺形土器・甕形土器 (以下、「形土器」を省略) で構成される。

まず壺は、大きさから言えば、3～6・10～14が標準の中型壺で、1・2は小型壺に相当する。そのうち5・6は広口壺である。

1・2は若干大きさに差があるが、両者ともに口頸部に文様が描かれる土器である。2には4段の網目状燃糸文が施文されるが、1にはハケ目痕が残るのみである。特に1については、2の燃糸文の隙間からハケ目痕が僅かに観察されることから、その後文様が施文される予定であったとも考えられるが、ハケ目痕がしっかりと施文されていることから、最初からハケ目痕で文様効果をねらっていたのではないかと考えたい。口頸部に文様施文がある土器は、東京湾沿岸の特徴を有するものである。

3は幅広の複合口縁を呈し、複合部にはLRの単節斜縄文を地文に4本一単位の棒状貼付文が4ヶ所付され、円形赤彩文が全周している。さらにその下端にはハケ状工具による刻みがまわっている。4は底部破片であるが、3同様に武蔵野台地では一般的な土器と言える。

5・6は当地ではあまり頻繁に出土例がない広口壺である。全体にハケ目調整後ヘラナデを施し、さらに胴部下半はその後ヘラ磨き調整が施されている。これらも東京湾沿岸の特徴を有するものであろう。

その他、10は単純口縁を呈する土器、11・12は無文地で幅広の複合口縁を呈する赤色土器、13・14は細縄文による羽状縄文が施される土器で、14はその下端に結節文が付加されている。

次に甕は、7・8・15～19で、そのうち7は小型台付甕である。すべてハケ甕であり、口縁部が残存する7・8・15～17は口唇部に刻みがまわっている。刻みは7・16・17がハケ状工具、8・15がヘラ状工具により施文されている。

以上、壺は、東京湾沿岸系の特徴を有する土器を主体としており、特に11・12の無文地の複合口縁の土器を見る限りでは、古墳時代初頭に一部入るものも共伴している。甕でも16のように口縁部がやや「く」字状を呈し、粗いハケ目調整が施され、さらに口縁部に軽い横ナデが加えられるものも古墳時代初頭に入るものであろう。

373Y出土土器 (第16図)

小型埴・小型台付埴・甕で構成される。ここでは、小型埴と小型台付埴について触れることにする。

3～5の小型埴・小型台付埴は、その精巧な作りから、小型精製土器と呼ぶことができる。

赤塚次郎氏は、廻間遺跡 (赤塚 1990) の報告中、「小型化」と「精製化」を「様式における志向性の変化」の中で説明している。これによると、「小型化」は、「ある型式において一回り小型化した形状のものが一定の組列を見せることにより形式として独立してゆく」とし、「各型式間に広く小型化が定着する」と分析している。4のような小型台付埴は、言葉は違うが、その過程の中で、小型器台と埴とが組合せられ合体した形式として誕生したものと理解できる。また「精製化」については、「胎土を良選し、器壁を薄くし、ミガキ調整を強調するものを意味」し、「小型品・中型品とわず精製化」する現象であると分析している。筆者には、赤塚氏のその真意を理解できたという自信はないが、「小型化」と「精製化」などといった「志向性」は、別々の現象であり、その現象が他型式間に及んだ場合に複数の情報が組み合わせり、新形式の創出につながるものだとすることを理解した。さらに赤塚氏は、

地域を越え同様な現象が多発的に起こる現象を「共鳴現象」と呼び、普遍化現象の中で説明している。

それでは、小型精製土器であるが、その「小型化」と「精製化」の両者の「志向性」が組み合わさった土器の出現の時期は、廻間遺跡7・8期の廻間Ⅲ式に見られる画期の中で理解することができよう（赤塚 1990・1994）。器台などの小型品については、すでに廻間Ⅱ式の中で誕生しているが、「小型品の精製化」は、廻間Ⅲ式以降の特徴と言うことができる。

また1・2の小型埴は、精巧な作りではないため、小型精製土器と呼ぶことはできないが、この小型精製土器の有無によって、一概に新旧を位置付けるには危険が伴うものと思われる。例えば、時期を設定する場合、小型精製土器が共伴すれば、新様相として捉えることができるが、共伴しなかった場合、短絡的に廻間Ⅱ式期に比定されてしまう場合も無いとは言えないからである。この1・2のような小型埴は、おそらく古墳時代に入っても精製化されない在土系土器との関連でワンクッション置いて検討する必要があるものと考えられる。なお、4の土器は、赤塚氏の分類の小型内壺土器に類似するものであるが、この類は廻間Ⅰ・Ⅱ式での存在であるようなので、やはり本報告では、小型器台と埴との組み合わせにより誕生した小型台付埴として考えることにしたい。

最後に、373Y出土の土器を埼玉県内の資料と比較した場合、坂戸市中耕遺跡出土の小型埴の形態から、中耕Ⅳ（杉崎 1993）の時期におおよそ比定されるものと考えられる。

【註】

- （註1）新部遺跡第8地点は、この西原大塚遺跡第65地点から北方向100m程のすぐ近距離に位置する。新部遺跡第8地点については未報告であるが、この8軒の住居跡については古墳時代前期でも新しい段階に比定される。また、新部遺跡第2地点からは、4世紀末～5世紀初頭に比定される1号住居跡が検出されていることから、西原大塚遺跡の住居跡に比較して1・2段階程新しい様相を呈しているものと考えられる。可能性として、弥生時代後期に西原大塚遺跡で繁栄した集落が、古墳時代に入り、新部遺跡方面に拡散した現象として捉えられるかもしれない。

【引用・参考文献】

- 赤塚次郎 1990『廻間遺跡』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
1994『3・4世紀の東海地域』『東日本の古墳の出現』株式会社 山川出版社
小倉 均 1991『弥生時代から古墳時代にかけてみられる祭壇状遺構について』『埼玉考古』第27号 埼玉考古学会
尾形剛敏・深井忠子 1996『志木市遺跡群Ⅶ』志木市の文化財第23集 埼玉県志木市教育委員会
2000『第4章 中道遺跡第44地点の調査』『志木市遺跡群10』志木市の文化財第28集 埼玉県志木市教育委員会
志木市教育委員会 1985『志木市の社寺』志木市の文化財第10集 埼玉県志木市教育委員会
杉崎茂野 1993『中耕遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第125集 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
藤波啓容・林 辰男・宮尾 亨他 1996『前野田向遺跡-第2地点-』板橋区遺跡調査会

圖 版



1. 調査区近景



2. 65号住居跡・212号土坑土層断面



3. 65号住居跡



4. 65号住居跡・212号土坑



5. 212号土坑



6. 10号溝跡発掘調査風景



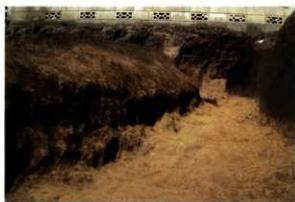
7. 10号溝跡測量風景



8. 10号溝跡土層断面



1. 10号溝跡(北から)



2. 10号溝跡(西から)



3. 10号溝跡(西から)



4. 10号溝跡(東から)



5. 調査区全景(西から)



1. 65号住居跡・10号溝跡出土遺物



遺構外 9



9裏 (拡大)

2. 遺構外出土遺物



遺構外出土遺物



1. A種 縄文



2. H種 無文



3. B種 撚糸文・文様原体細・施文粗



4. C種 撚糸文・文様原体細・施文密



5. D種 撚糸文・文様原体中・施文粗



6. E種 撚糸文・文様原体中・施文密



7. F種 撚糸文・文様原体太・施文粗



8. G種 撚糸文・文様原体太・施文密
(実物大)



1. 発掘調査風景



2. 371号住居跡



3. 372号住居跡遺物出土状態



4. 372号住居跡遺物出土状態



5. 372号住居跡炉



6. 372号住居跡貯蔵穴付近



7. 372号住居跡貯蔵穴・入口ピット



8. 372号住居跡



1. 発掘調査風景



2. 373号住居跡遺物出土状態



3. 373号住居跡遺物出土状態



4. 373号住居跡遺物出土状態



5. 373号住居跡遺物出土状態



6. 373号住居跡遺物出土状態



7. 373号住居跡炉



8. 373号住居跡



1. 372号住居跡出土遺物



土 玉

2. 373号住居跡出土遺物



1. 372Y-1



2. 372Y-2



3. 372Y-3



4. 372Y-7



5. 372Y-8



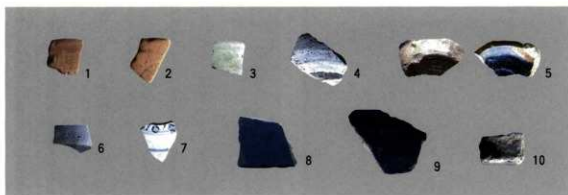
6. 373Y-1



7. 373Y-2



8. 373Y-4



遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しきしいせきぐん							
書名	志木市遺跡群14							
副書名						巻次		
シリーズ名	志木市の文化財					巻次	第36集	
編著者	尾形剛敏 深井恵子 青木 修							
編集機関	埼玉県志木市教育委員会							
所在地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号 TEL 048 (473) 1111							
発行年月日	平成16(2004)年10月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 (°'")	東 経 (°'")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市 町 村	遺跡番号					
たごやいせき 田子山遺跡 (第81地点)	しきし ほん ちゆう 志 木 市 本 町 2丁目1744-3	11228	010	35° 49' 51"	139° 35' 3"	20020610 ～ 20020627	89.62	個人住宅建設
にしん だいかい 西原大塚遺跡 (第65地点)	しきし さい ちゆう 志 木 市 幸 町 2丁目3042-1	11228	007	35° 49' 37"	139° 34' 00"	20020726 ～ 20020809	115.93	個人住宅建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特 記 事 項		
田子山遺跡 (第81地点)	集 落	縄文時代 平安時代 平安時代?	遺構外 住居跡 1軒 土 坑 1基 溝 跡 1条	土器・石器 須恵器 須恵器・鉄製品		早期撚糸文系土器が比較的多 とまって出土した。 10Mとした溝跡は、過去の調査 から、御嶽神社を外周するものと 推定される。遺物には良好なもの はないが、古墳の可能性もある。		
西原大塚遺跡 (第65地点)	集 落	弥生時代後期末葉 ～ 古墳時代前期	住居跡 3軒	土器・土師器・ 土製品・石器		373Yから小型精製土器が出土し た。小型台付埴あり。		

志木市の文化財 第36集

志木市遺跡群 14

発 行 埼玉県志木市教育委員会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号
発 行 日 平成16(2004)年10月29日
印 刷 株式会社 丸 文 堂